

平成25年度 国立教育政策研究所 文教施設研究講演会

日本とフィンランドの学校建築

日本の施設一体型小中一貫教育校と
フィンランドの総合学校を中心に



PISA(OECD生徒の学習到達度調査)で、常にトップクラスの成績を残している教育先進国フィンランドでは、1998年に基礎教育法が改正され、小中学校を新設等する場合、基本的に9年制の総合学校(小中一貫教育校)を設置することとしています。現在、日本においても、小中一貫教育の取組が進められ、2007年度以降新設された約154校の施設一体型小中一貫教育校等が確認されており、今後、少子化による学校統廃合等に伴い施設一体型小中一貫教育校が更に増えることが想定されています。そのため今後の日本の施設一体型小中一貫教育校づくりの新たな視点について、フィンランドの先進的な経験から学ぶことを目的に、フィンランドから学校建築の専門家であるタバネン国家教育委員会チーフアーキテクトと子供の行動研究に取り組むキュッタ博士、日本から著名な学校建築家である工藤和美東洋大学教授をお迎えし、平成25年度文教施設研究講演会を開催いたします。



レイノ・タバネン 氏
フィンランド国家教育
委員会 主任建築家
演目：フィンランドの
総合学校建築



マルケッタ・キュッタ 氏
フィンランド アールト大学
都市・地域研究センター 准教授
演目：フィンランドと日本の
子供の行動を促す環境
と学校空間



工藤 和美 氏
東洋大学 教授
シーラカンスK&H(株) 代表取締役
演目：日本の施設一体型
小中一貫教育校の建築

報告書

国立教育政策研究所 編

平成26年1月28日(火)

13:00-16:30文部科学省第1講堂

主催



文部科学省
国立教育政策研究所

共催

フィンランドセンター
東京工業大学教育施設環境研究センター

後援

一般社団法人日本建築学会

日本とフィンランドの学校建築

日本の施設一体型小中一貫教育校と

フィンランドの総合学校を中心に

平成26年1月28日(火)

13:00-16:30文部科学省第1講堂

プログラム・目次

I 挨拶	5
1. 開会	
2. 主催者挨拶 尾崎 春樹 国立教育政策研究所長	
3. 共催者代表挨拶 カウコ・ライティネン フィンランドセンター所長	
II 基調講演	11
1. 「フィンランドの総合学校建築」 レイノ・タパニネン フィンランド国家教育委員会 主任建築家	レイノ・ タパニネン -13
2. 「フィンランドと日本の子供の行動を促す環境と学習空間」 マルケッタ・キュッタ フィンランド アールト大学都市・地域研究センター 准教授	マルケッタ・ キュッタ -29
3. 「日本の施設一体型小中一貫教育校の建築」 工藤 和美 東洋大学 教授 シーラカンスK&H株式会社 代表取締役	工藤 和美 -41
III パネルディスカッション&質疑応答	63
コーディネーター 木下 勇 千葉大学大学院園芸学研究科 教授	
IV 閉会の挨拶	77
齋藤 福栄 国立教育政策研究所文教施設研究センター長	

平成25年度 国立教育政策研究所 文教施設研究講演会

日本とフィンランドの学校建築

—日本の施設一体型小中一貫教育校とフィンランドの総合学校を中心に—
平成26年1月28日(火) 13:00～16:30 文部科学省第1講堂



主催者挨拶

尾崎 春樹
国立教育政策研究所長



共催者代表挨拶

カウコ・ライティネン
フィンランドセンター所長



講演

レイノ・タパニネン
フィンランド国家教育委員会
主任建築家



講演

マルケッタ・キュッタ
フィンランド アールト大学
都市・地域研究センター 准教授





講演 工藤 和美
東洋大学 教授



コーディネーター 木下 勇
千葉大学大学院 教授



パネルディスカッション



閉会の挨拶 齋藤 福栄
文教施設研究センター長



会場の様子

I . 挨 拶

1. 開 会

司会（西 博文：国立教育政策研究所）

ただ今より、平成 25 年度国立教育政策研究所文教施設研究講演会「日本とフィンランドの学校建築」を開催させていただきます。初めに主催者を代表いたしまして国立教育政策研究所長、尾崎春樹より御挨拶を申し上げます。

2. 主催者挨拶

尾崎 春樹 国立教育政策研究所長

尾崎：こんにちは。ただ今御紹介いただきました国立教育政策研究所の所長の尾崎でございます。本日は、平成 25 年度の国立教育政策研究所の文教施設研究講演会に 300 名ほどの方にお集まりをいただきました。誠にありがとうございます。我が研究所が担当しております研究調査に OECD のやっております PISA というものがありますが、2012 年の最近の調査で日本は過去の成績よりも大分盛り返してまいりまして、読解カリテラシーその他 3 分野で、平均得点が比較可能な過去の中で一番高い成果を上げることができました。ただ、その中で数学的リテラシーの得点の状況を見ますと、面白い因果関係がございまして、就学前の、小学校に上がる前の教育歴が 1 年より長く通ったと回答した生徒の、その後の 15 歳時点での平均得点というものが高くなっていると。就学前教育と PISA の高校 1 年生、15 歳段階での得点は、就学前教育の長さとする意味では相関があるのかもしれないということで、一貫した教育の可能性と言いましょか、その成果というものについて注目をすべき点があるのではないかと考えているところでございます。

この PISA で過去、トップクラスの成績を残してまいりました教育先進国は、御案内の通りフィンランドでございますけれども、1998 年にフィンランドでは基礎教育法が改正をされ、小中学校を新設する場合には、基本的に 9 年制の総合学校を設置することとなっているのであります。日本でもこの小中一貫教育というものを見ますと、平成 15 年に構造改革特区に始まりまして、その特区制度が平成 20 年には全国化され、この小中一貫教育というものが推進をされてきているわけでございます。現在、さらに、官邸の教育再生実行会議で、小中一貫の義務教育学校の在り方を含めて、学制改革の議論が進められているところでもございます。

また、施設の方を見ますと、平成 19 年度以降に新設された学校で、分かっているだけで施設一体型の小中一貫教育校、施設をまとめて小中学校を建てているケースが約 150 校あるということで、これは今後少子化によって、学校統廃合というものが避けられない、避けにくい状況の中で、この施設一体型の小中一貫教育校というのは更に増えるのではないかと想定

されるわけでございます。そういうことを考えますと、日本とフィンランドは気候風土こそ全く違いますけれども、教育背景と言いましょか、学校建築については比較研究して学び、参考にすべき点がたくさんあるのではないかと考えているところでございます。

本日はこのような状況の中で、今後の日本の施設一体型の小中一貫教育校づくりというものを考える際に、フィンランドの先進的な経験から学びたいということで、はるばる遠くフィンランドから、学校建築の専門家でありますフィンランド国家教育委員会主任建築家のレイノ・タパニネン氏、子供行動学の権威でいらっしゃいます、フィンランドアールト大学のマルケッタ・キュッタ氏にお越しいただいております。また、日本からは、著名な学校建築家であります東洋大学の工藤和美教授、コーディネーターとして千葉大学の木下勇教授をお招きしております、文教施設研究講演会「日本とフィンランドの学校建築」を開催する運びとなったわけでございます。

今回の開催に当たりましては、共催のフィンランドセンター、それから東京工業大学教育施設環境研究センターをはじめといたしまして、関係の皆様方に大変な御協力をいただきました。心より感謝を申し上げます。本日は限られた時間ではございますけれども、この講演会が施設一体型小中一貫教育校の施設の在り方を考える上で、有益な知見を得る機会となりますように、また、それが今後の子供たちの学習環境向上のための施設の在り方に寄与することを期待申し上げます、簡単ではございますが、冒頭の挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いたします。(拍手)

司会：尾崎所長ありがとうございました。

次に共催者を代表いたしまして、フィンランドセンター所長、カウコ・ライティネンより御挨拶申し上げます。

3. 共催者代表挨拶

カウコ・ライティネン フィンランドセンター所長

ライティネン：まず、尾崎所長、そして御列席の皆様、日本におけるフィンランドセンターを代表いたしまして、皆様を国立教育政策研究所文教施設研究講演会、「日本とフィンランドの学校建築」に心から歓迎申し上げたいと思います。東京におけるこのフィンランドセンターですが、1998年に発足いたしました。東アジアにおける唯一のフィンランドセンターでもあります。私どものセンターは学術的な組織であり、様々な文化活動に関わっております。また、日本、フィンランド、両方の教育の研究も行っています。したがって、今回、このようにこのセミナーの共催者となり得たことを大変うれしく思います。また、3名のすばらしいスピーカーをお迎えすることができました。フィンランド国家教育委員会の主任建築家であられるレイノ・タパニネン様、フィンランド アールト大学都市・地域研究センター准教授のマルケッタ・キュッタ様、そして、東洋大学教授であられる工藤和美様をお迎えできて大変うれしく思っております。また、ただ今御説明がありましたとおり、千葉大学の木下教授にも関わっていただいております。

先ほど、尾崎所長から御指摘もありましたけれども、つい最近、2012年のPISAの結果が発表されたばかりです。つい先月のことです。それ以前の評価と比べると、日本はスコアを改善し、それに対してフィンランドは若干下がっています。数学においても日本は今や第7位、フィンランドは12位となっています。また、読解力に関しては、日本は第4位、フィンランドは第6位となっています。科学に関しては両方ともにより接近しています。日本が4位、そしてフィンランドが5位と接近しています。

長年にわたり、日本の教育の専門家の方々、学校の先生を含めた専門家の方々がフィンランドを訪問され、フィンランドにおける高いPISAのスコアの秘密を知りたいとおっしゃっております。しかし、個人的に思いますに、今度はフィンランド人が日本から学ぶべきであり、そして、その他の地域において高いPISAスコアを持っている国々からフィンランドが学ぶべきだと思います。

フィンランドの今までの非常に高いPISAのレベルの秘密は一つだけではないと思っております。ただ、一つ言えるのは、私どもの教育制度、そして、フィンランドの社会全般にお

ける平等性の高さが関わっているということは疑いの余地もないと思います。すなわち、フィンランドという小さな国においては、すべての学生が、学校における個々のニーズに対して十分な注意が払われるべきであるということなのです。本日のテーマ、すなわち学校建築は、全ての国々において、学習を促進する上で極めて重要なものであると考えております。御静聴ありがとうございました。

司会：ライティネン所長、ありがとうございました。

II. 基調講演

講演

フィンランドの 総合学校建築



レイノ・タパニネン 氏

フィンランド国家教育委員会
主任建築家

司会：それでは早速、基調講演に入らせていただきます。本日は3名の方に基調講演をお願いしております。最初はレイノ・タパニネン氏に講演をお願いいたします。タパニネン氏はフィンランド国家教育委員会という、義務教育の目標と内容の決定や、カリキュラムの作成と承認、学校施設の制度などの執行機関で学校建築の専門家である主任建築家として活躍されています。今回はフィンランドの総合学校建築をテーマに講演をお願いいたします。

タパニネン：(スライド1) 友人の皆さま、同僚の方々、そして御列席の皆様こんにちは。最初に9月に、日本への訪問及び東京においてシンポジウムで講演をするという御招待をいただいたことについて御礼を申し上げます。今回、初来日でございます。私はいただきました温かなおもてなし、そして東京における環境に感服いたしました。今回の体験はこれからも素晴らしい記憶と思い出となり、また私は日本に戻ってくると思います。

さて、私はフィンランド国家教育委員会に勤めております。政府の機関でございます、教育省の一環の組織です。そういった意味では恐らく、国立教育政策研究所と似通っているかと思えます。職員は250名で、主に教育関係者や元教師などです。私どもは主に学校、そして国におけるコアカリキュラムを策定することがあります。これは、国内の様々な地方地域におけるカリキュラムの基準となるものです。現在、フィンランドによってこのカリキュラムの改定が行われています。

また、私どもは市区町村ですとか、学校、そして教師に対して様々な支援をさせていただいております。また行政の方々、教育者の方々に対しても支援をさせていただいており、そのサポートサービスの一つが学校の建築とデザインに関するものです。私が所属しているのは、学校の設計並びに建築に特化した部署です。

例えば建築家や教師の方々のためのガイドブックを出版したり、発表したり、学校建築に関するセミナーも主催しております。また、提言を出すこともやっております。これは今では、基準的なものではなく、ガイドラインとして出しております。また、コンサルタント業務なども行っています。

本日お話しするテーマはフィンランドの総合学校建築ということで、これにどう取り組んでいるのか、どういう経緯で発展してきたのか、並びにその中身と目標についても触れたいと思います。

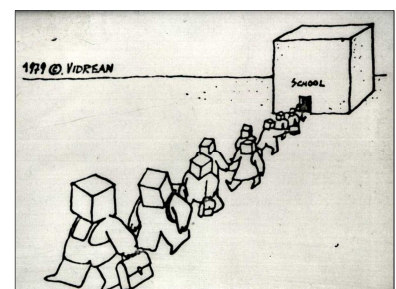
(スライド2) では、最初にフィンランドと日本ということで御覧いただきましょう。実は昨日と今日、日本の主催者の方とお話をいたしまして、両国の様々な共通点と相違点についてお話をさせていただいたわけです。もちろん違いは多々あります。フィンランドは小さな



スライド1



スライド2



スライド3

国、人口は500万人。一方、日本は人口が大きな国です。また、気候は確かに違っている。でも、共通点多々あるわけです。我々は建築が大好き、デザインが大好きという国民性です。サウナも、そして風呂も大好きですね。また、自然も大好き。人と自然のつながりが大変重要であるという共通点があると思います。国の面積、規模も似ています。フィンランドと日本の地図を並べてみました。お気付きだと思いますけれども、ほぼ長さもサイズも同じであるということが分かるかと思えます。ある意味我々是一緒なのです。世界の違った地域には住んでいますけれども、共通点多々あるのです。

(スライド3) さて、学校建築は恐らく人間の生活で最も重要な場所の一つだと思います。我々が子供時代通った学校のことをよく覚えていますよね。先生のこと覚えています。また、学校における騒音、声、音を覚えているものです。多分学校の教室の匂いも覚えていると思います。

どういうことかと言えば、学校は大変重要な場であるということです。教育者は隠れたカリキュラムという概念を知っていなければなりません。学校は授業だとか、教科書だけではありません。環境なのです。非常に重要な環境なのです。学校の建物というものは私たちの考え方に影響を及ぼすものです。そして、子供たち、学生たち、また大人である我々も、自分のイメージを抱く上で非常に重要な場であるということなのです。

(スライド4) さて、先ほどカウコ・ライティネン所長がおっしゃったとおり、フィンランドはこれまでのPISAのスコアで非常にいいスコアを出しました。フィンランドの学生は、例えば数学ですとか、また問題解決能力、そして科学的なリテラシー及び読解力での高い能力を今まで発揮してきました。一番最近の12月に発表になったスコア、これは2012年のものですけれども、これを見るとフィンランドの結果は少し落ち込みました。実はショックを受けました。どうしてこれだけ落ち込んでしまったのか。私どもの教育成果はどうしてこう変わったのか。逆に、アジアの国々、例えば日本、韓国、香港など、我々を今や追い越している。したがって皆さんは、恐らく我々、我々の学校そして学生よりも努力をされたのでしょうか。ですから、どうしてそうなったのかということは今後突き止めなければなりません。また、フィンランドの男子学生のエネルギーや関心は、学習よりもゲームなどに割り当てられています。これについてやはり戦っていかなければならないと思います。

(スライド5) さて、どうしてフィンランドがPISAの成績が今まで良かったのかというお話がありました。どういった理由があったのでしょうか。既にライティネン所長からもお話がありました。いくつかの理由があります。まずは、小学校から大学に至るまで教育を無償で受けることができるということです。全ての学生、子供たちは、教育を受ける機会が平



スライド4



スライド5



スライド6

等に与えられています。

また、例えば行政組織も非常に柔軟性が高い。すなわち、国から市区町村へ、また学校に至るまで権限が分権化されているということがあります。さらに、よりインタラクティブ、双方向の協力的な仕事の進め方を奨励しています。

それから、非常に重要な大きな理由があります。高い技能を有する教員がいるということです。幼稚園、小学校の先生もみんな大学の学位を持っています。5か年の修士課程の学位です。そして、社会では教師は非常に高い評価を受けています。正にプロフェッショナルとして高い評価を受けているのです。給与なども、その他の教職、例えば大学の教師などと比べても決して遜色はない給与です。それと同時に、これだけPISAの成績が良かったもう一つの理由としては、もしかしたら、質の高い学習環境があることかもしれません。例えば、学校建築ですとか、学習環境に相当程度、投資をしてきました。それが要因なのかもしれません。

(スライド6) そうした場合考えなければならないのは、質の高い学校というのはどんなものなのかということです。どのように構成されているのか。学校の評価をする基準、質の高い学校とはどのような学校なのか評価する基準がなければいけません。学校建築と学校の物理的環境についての研究がたくさん必要です。ですが、ここでもう一つ考えなければならないのは、学校の建築はそもそも規範、規則が必要なのかどうかということです。

(スライド7) フィンランドにおける学校建築というのは、1993年までは非常に厳しい規範、規則に縛られていました。しかし、それ以降はその規範によって制約するシステムはなくなり、今の学校の建築、そして学校の設計というものは、建築全般に係る、例えば建築法ですとか、その布告、規制のみによってコントロールされています。すなわち、学校建築に特化した規範、規則はないということです。学校に関する法令によっては、適用される箇所は1か所のみです。「教育に参加する人々には安全な学習環境が保障されなければならない。」この規定だけです。では、安全な学習環境とは何なのかという定義が必要になります。

(スライド8) さて、私が属しております部署において、総合学校に関わるガイドラインを策定しました。どのようにサイズ設計を行うのか、機能に対して、どのように適切なものとするのかを示したものです。これについては、私どものウェブサイトからダウンロードしていただければ御覧いただけます。本日の資料の中にそのアドレスがあります。ちょっとこの話をいたしますと時間がかかりますので、御覧いただければと思います。

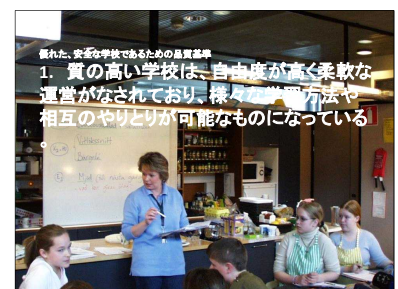
(スライド9) もう一つ発表しているのがあります。優れた安全な学校であるための品質基準というものを発表しています。まず一つの基準としては、質の高い学校は、柔軟性並びに



スライド7



スライド8



スライド9

自由度が高く、柔軟な運営がなされていること。そして様々な学習方法や、相互のやり取りが可能になっていること。要するに、学校の建築というものは、建物、ただ単に同じ規模の同じサイズの教室がまとまっていて、それらが廊下でつながっているだけではないということです。多機能なスペース、多機能な学校でなければならないのです。

(スライド10) 二つ目の基準です。質の高い学校は単なる学校ではないのだということ。学校は、その地域の活動、並びに文化の活動の中心地となるわけです。すなわち学校は近隣の方々、親、大人たちが、学校時間外及び夏季の間活用できる、そういったスペースでなければなりません。

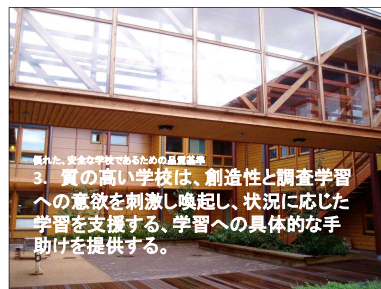
(スライド11) 三つ目の基準です。ただ単に教科書や授業だけではなく、学校建築そのものが実は教材なのだということです。すなわち学ぶ具体的な手段になり得るということです。例えば数学だとか科学などを教える上で、学校の建築、そして物理的な環境ほど適したテキスト、教材はないのではないのでしょうか。学習の具体的な手助けを提供するものでなければならないのです。(スライド12) また、質の高い学校というものは美的でなければならない。美学的な思想がある、そして子供たちの精神的な、社会的な幸福、福祉を強化するものでなければなりません。

(スライド13) もう一つです。質の高い学校は持続性を大切にいたします。持続性はただ単に学校の機能ですとか、日々の活動だけではありません。教材や教科書のリサイクルも必要ですが、学校の建築自体も持続性がなければならない。例えば、費用効率も高く、エネルギーの効率も良く、リサイクルできる材料を使った建物であるということも必要であると思います。

(スライド14) また質の高い学校は、適切なサイズ設計を持っているものです。要するに、目的に適したサイズでなければなりません。大き過ぎても小さ過ぎてもいけないということ



スライド10



スライド11



スライド12



スライド13



スライド14



スライド15

です。要するに、柔軟性の高いものでなければならない。そして、そのスペースの活用も効率的でなければなりません。また、後から追加的な機能に対して増築が可能であることも必要です。

(スライド15) 七つ目の基準です。質の高い学校は、身体健康と安全性を高めるものです。要するに学校において、簡単に順応できなければなりません。障害者の方々などが簡単に学校に入ることができ、そして、通えるようなものでなければならないという考え方です。

(スライド16) フィンランドの学校の今、そして未来はどういったものでしょうか。まず、我々は生徒中心の学習方法を行っております。すなわち、その教室、そして教授法においては先生が中心ではなく、生徒が中心なのです。日々の学校においては、特定のテーマに重きを置き、学習教科は共通のプロジェクトによって協力するようになっています。そうすることで学校のレッスン、そして学校の時間は、やれ数学だ、科学だと分かれているわけではなく、お互いに協力をするという形なのです。また、調べ物重視の検証的な、客観的な、そして自発的なアプローチというものを推奨しています。

(スライド17) また、我々は最新のITを活用した機材を効果的に活用しようとしています。そして、そういった機材に投資を試み、そして全ての教室において、例えばスマートボードを導入しようとしてきました。もはや、先生だけではなく、生徒たちもこういった機材を使っているのです。(スライド18) また、フィンランドは人口密度が低い国です。そして、過疎地域もあります。それでも学校同士で協力することで、また近隣コミュニティと協力することで、さらには、国の向こう側の学校とも協力をするために、例えばEラーニング、すなわち、遠隔教育などもできるということでしょう。例えばこれを御覧いただきますと、別の学校の先生が別の学校の人々に対して教えているところです。我が国ではそういった方法で、いわゆるITを使った遠隔教育を行っているのです。



スライド16



スライド17



スライド18



スライド19



スライド20



スライド21

(スライド19) また、我々は可能な限り柔軟性の高い形で学校家具を使おうとしています。どういふことかと言いますと、例えばいろんなアレンジが可能な家具でなければならないと。1日の生活において。(スライド20) また、いわゆるメディアテークというものがあります。ワークステーションもある、ラップトップもあると、こういったスペースで学生が学校後や授業の後、自由にやって来て、そして自習ができるのです。情報を探したり、検索したり、そして情報を活用したり生み出したり、そういったこともできるようになっています。

(スライド21) また、確かに学校の火災対策に対する規制もありますけれども、廊下や移動空間をこういった学習の場に活用しようとしています。(スライド22) 他の国と同様に、我々は特別な教室を、例えば図画ですとか、地理そして自然科学、物理、化学ですとか、家庭科用に設けています。

(スライド23) また、私どもは学校の図書館にも相当程度の注力、並びに労力をかけています。図書館は例えば、親ですとか、それから近隣住民の方々を含めたコミュニティの人々が集まる場です。ただ単に学校だけのものではなく、コミュニティのための図書館なのです。しかしながら、書籍の持つ意味というものは変わっています。今、情報にしても材料にしてもネットで探すことが多くなってしまっています。

(スライド24) それではフィンランドの校舎は今どうなっているのか。そして、未来にはどうなるのでしょうか。

まず、今も既にそうなのですが、やはり柔軟性と可変性が必要であるということです。多くの場合、学校施設は実は都市空間と同じではないかと思われます。すなわち、まるで都市のようであり、そして、村のようなのです。例えば学校の真ん中に人々が集まる場があると、常にこれはオープンで透明性の高い空間でなければなりません。したがって、ガラスの壁ですとか、ガラスのドアになっています。すなわち校舎の中、学校の内部が1日中見ることができる、そういった構造となっています。

(スライド25) さて、建築家は学校のプロジェクトというものは、デザインプロジェクトとして大変重要であると考えています。利用者の参加はやはり大変重要だと思います。建築家も、そしてエンジニアも、ユーザーと一緒に取り組むことで、一緒に学校のビジョンというものを具現化しようとしています。これはその学校のカリキュラムにのっとった学校のミッション、使命に応じたビジョンを策定するのです。でも、常にチームワークなのです。一人の建築家が全てを決定し、学校はこうあるべきだと決めるわけではなく、チームワークということでユーザーと協力しなければなりません。みんな一緒になってこういった糸を一つの方に引っ張っていくことが求められます。



スライド 22



スライド 23



スライド 24

(スライド26) これは典型的な総合学校で、ヘルシンキにあるものです。まず、中央の広場的なものがあります。こちらの場合は、食堂です。そして、その食堂とつながるようなステージがあります。いろんな状況によって、学校全体がいろんな形で集まることができます。

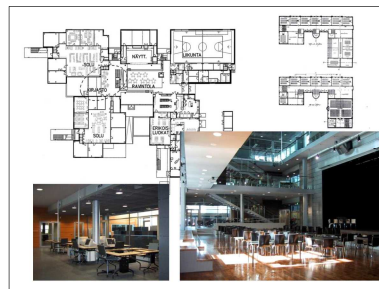
あと、いわゆるホームエリアと呼ばれているものがありまして、これは、様々な異なる年齢集団のためのスペースです。それから特別教室があります。フィンランドでは今、このような形態が典型的なものです。中央の広場、人々が集まる場所があり、そして、ホームベース的なものがあるわけです。ちなみにこの学校の中央広場的な、人々が集まる場所は学食がその場になっています。また、ワークステーションも学校中にありまして、自由に使うことができます。

また、従来型の、旧来型の学校もあります。旧来型の学校というのは、例えば教室の面積、サイズはみんな一律です。廊下がこれらの教室をつなげています。では従来型の学校はどうしたらいいのか。これが今一つの課題となっています。従来型の校舎をどうやったら新しいニーズ、新しい方法に対応させることができるのか、課題となっています。(スライド27) 今、フィンランドにおいて大きな課題です。もちろん、未来の学校を思い描くのは、想像することは楽しいことで、非常にインスピレーションに満ちていてチャレンジングであり、教師にしても、また建築家にしても、その未来の学校を考えるのは大好きなのですね。どういった内容になり得るのだろうか。また、その物理的な外観はどのようなのでしょうか。考えるのは皆さん好きなのです。でも、多くの地方の学校はこういったものなのです。

(スライド28) そこで考えなければならないのは、まず、どうやって今ある古い学校の改修とメンテナンス、維持をするかということです。そして、どうやったら新しいニーズに合わせることができるのでしょうか。近代的な技術ですとか、インフラにどうやって展開していくのでしょうか。この古い教室をどうやってこの新しい考え方に合わせて変えていったら



スライド 2 5



スライド 2 6



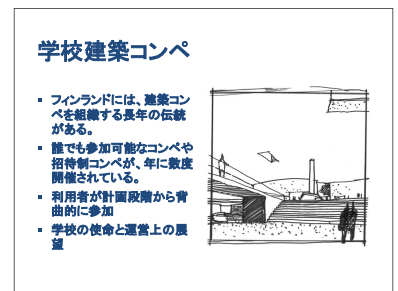
スライド 2 7



スライド 2 8



スライド 2 9



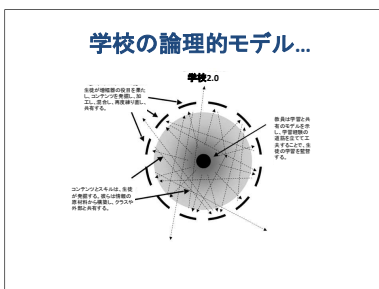
スライド 3 0

いいのでしょうか。(スライド29) 実は、古い学校というのは非常に価値があるのです。貴重なのです。すばらしい校舎であることが多い。では、その古い学校が持つ威厳というものは、どうやったら保持できるのか、これもやはり重要だと思います。

(スライド30) フィンランドには、例えば、誰でも参加可能な建築コンペと言いますか、それを組織する長年の伝統があります。そして、若い建築家、学生であってもコンペに勝つことができるのです。そして起業し、自分たちのオフィスを立ち上げる。そういったことも可能です。また、私どもは様々な学校の建物のコンペを毎年主催しています。(スライド31) 多くの場合、例えば、そのコンペティションの最初の段階において、セミナーなどを行います。すなわち、学校として描くビジョンを説明し、学校はどうあるべきなのか、近代的な学校のあるべき姿、そして、将来の学校のビジョンを伝えます。(スライド32) このケースでは建築家がこの理論を物理的な形に転換しています。こういった形が最適かどうかは別問題ですが。

(スライド33) これは二つの事例です。実際に行われた学校のコンペティションで優秀賞を獲得したこのエスポー市の一つの学校に関わるデザイン、二つ御紹介しております。(スライド34) 次は、実際に賞を取った提案にのっとった事例を御紹介したいと思います。

まず一つ目、エスポー市、ヘルシンキの近郊にある都市です。総合学校です。6歳から15歳の学校です。コンペのエントリーネームは「Brothers (兄弟)」。小さい低学年の方が小学校、それから中等学校の方がこちらになります。ウィングになって分かれています。建物は木とレンガで造られています。(スライド35) ファサードです。これは近年のフィンランドの学校建築に見られる典型的な手法です。これが内部です。(スライド36) 中央の広場の状況です。食堂です。そしてこの階段は講堂として使えるようになっています。(スライド37) この写真はエントリーホールから上がったところから撮ったものです。(スライド38) 典型的な教



スライド31



スライド32



スライド33



スライド34



スライド35



スライド36

室です。図画工作の授業が行われている様子です。照明は非常に重要です。フィンランド人にとってとても重要なのです。フィンランドの冬季には、それほど日光がないからです。ですから、できるだけ窓の採光ができるようにしています。エネルギー効率は高くはなりませんけれども、開口部を広げています。(スライド39)そして、天窗を活用し、内部に光ができるだけ豊富に取れるようにしています。

(スライド40) もう一つコンペで優勝した提案によって造られた学校の例です。ラトカルタノ校です。これも総合学校であり、小学校から中等学校までです。ユネスコスクールでユネスコからの支援も一部受けています。(スライド41) 配置図です。敷地はかなり小規模で、移民が多い地域です。国籍は20もあります。様々な言語が学校でも話されているという学校です。(スライド42) 平面図です。こちらでも典型的な学校がどうなっているかが分かります。中央の食堂であるミーティングプレイス、会合を持てるところに、そのほかのエリア、教室などが接続されています。

(スライド43) この学校では施主であるヘルシンキ市が、自然の換気システムで実験した



スライド37



スライド38



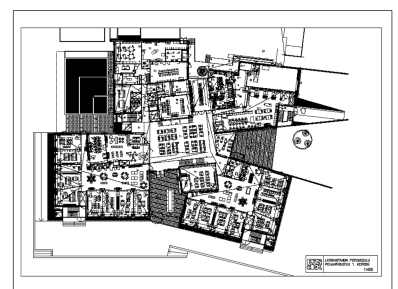
スライド39



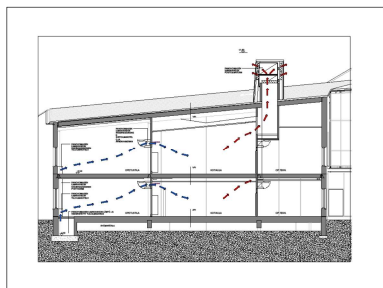
スライド40



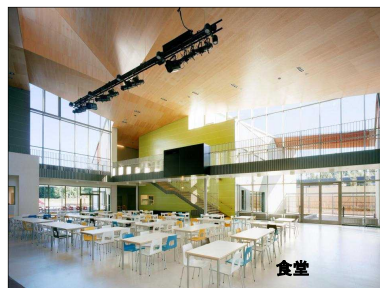
スライド41



スライド42



スライド43



スライド44



スライド45

いと考えました。ですので、自然の換気をどのように使用すればいいのか検討されました。フィンランドでは、これは非常に難しいやり方なのです。機械的なベンチレーション、機械換気方式がフィンランドでは主に使われているからです。(スライド44) これはレストラン、食堂の写真です。御覧のとおり、レストラン、食堂はかなり価値の高いものと考えて、重要視しています。(スライド45) これはホームベースのロビーの写真になります。それぞれのホームベースにおいては、それぞれのロビーエリアが設けられており、教室がこのロビーエリアに接続されています。ガラスで仕切られており、透明性が高いと言えます。

(スライド46) これは外部の写真、外観と、それから食堂です。(スライド47) このレストランは活発に課外活動でも使われています。生徒たちがやって来てフリー時間を過ごします。家に帰る前にここで、このスペースを使って課外活動、プロジェクトの作業をしたりします。

(スライド48) リサイクルもこの学校における主なテーマの一つでした。リサイクルされた材料、例えば古紙などを使うことを促進しています。(スライド49) 持続可能性は全ての活動に関連付けられています。例えばこの図画工作の授業において、教室ではリサイクル可能なマテリアル、材料のみを使っています。(スライド50) この写真は家庭科と美術の教室です。様々な科目を同じ教室でシェアすることができるようにしています。お互い同じ設備、什器を使うことができるというベネフィットがあるからです。

(スライド51) この学校はホスマリンプスト校です。エスポー市にあります。保育園と就学前、そして小学校という構成になります。これは全て木造です。OECDの学校施設好事例集にも掲載されています。(スライド52) これはかなり日本風とも言えます。コンパクトだからです。中庭があります。全て木材で造られている木造建築です。(スライド53) これが平面図です。御覧のとおり、幼稚園、又は保育園の部分がこちらにあり、こちらが小学校です。そして、食堂はこちら。ここが中庭です。



スライド46



スライド47



スライド48



スライド49



スライド50



スライド51

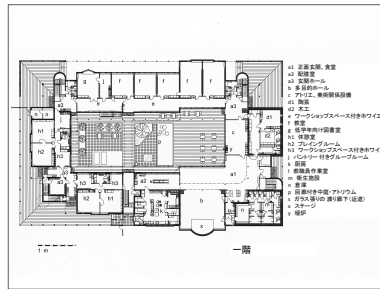
(スライド54) 中庭の写真です。御覧のとおり、この写真を撮った日は雨が降った日でした。だいたいフィンランドではこのような天気が多いのです。(スライド55) ここで渡り廊下が棟をつなげています。2階で接続しています。(スライド56) 保育園の中庭です。(スライド57) ソーラーパネル、太陽光を使っています。ばかげていると思われるかもしれませんが。フィンランドでは日光が余りにも少ないので。しかし、何とかして再生エネルギーを使いたいと考えています。(スライド58) 食堂の写真です。ワークステーションを廊下に設けています。生徒たちがそれぞれ自由に廊下などのスペースを活用して作業ができるように。(スライド59) こちらは保育園の様子の写真です。

この学校にも移民家庭から来る子供たちが多くいます。20国籍ほどあります。教師と保護者との間の協力が進んでいます。文化的な違いや問題があるかもしれませんが、緊密な協力が行われるようにしています。

(スライド60) フィンランドにおいて、いい学校ばかりではありません。やはり、問題のある学校があります。多くの学校においては屋内の条件が良くありません。健康上の問題につ



スライド 5 2



スライド 5 3



スライド 5 4



スライド 5 5



スライド 5 6



スライド 5 7



スライド 5 8



スライド 5 9



スライド 6 0

ながることもあります。湿気が多いわけですから。建物の湿気が多くなるとカビが生えます。これによって学校の改修が必要になり、バラックのような仮校舎を設けなければいけません。そして、その間に本校舎の改修が行われるということです。

(スライド61) 最近の最も大きな問題は、学校の安全という問題です。フィンランドでは2007年と2008年において二つの銃乱射事件がありました。生徒が学校に拳銃を持って来ました。そして10人を超える生徒及び教師を殺傷したという事件がありました。ショッキングな事件でした。どうして我が国において、我々のように静かな国においてこんなことが起こり得るのかというショックがありました。(スライド62) 犯人のうちの一人の写真です。国家的な危機となりました。大きな悲しみでした。

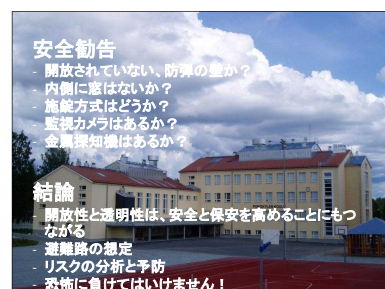
(スライド63) 大きな議論が巻き起こりました。何をすべきか、学校を変えなければいけないのか。我々の学校は透明性が高く、中がよく見えます。施錠がされていないから、誰でも簡単に入ってしまえるのではないのか、ガラス壁ではなく、防弾壁にしなくてはならないのではないのか。例えば壁はレンガにするべきか、内側に窓を作るべきではないのか、施錠方式はどうか、監視カメラは要るのか、金属探知機は要るのかなど、こういった議論が事件直後から発生しました。ですが、こんなことは問題の解決にはならないとすぐに分かりました。学校の透明性は維持しなければいけません。そして、問題を起こしそうな容疑者、疑わしい人物をまず検知し、問題が起こる前に止めなければいけない。それが必要なのだと。開放性と透明性を持つことこそが安全と保安を高めることになるという結論でした。また、避難路の想定をしなければいけない。リスク分析と予防を事前に行わなければいけないと。今は、全ての学校において、このような、いわゆるセキュリティ計画を策定することになっています。しかし、まず言えることは恐怖に負けてはいけないということです。我々がやっていることを継続することが必要です。



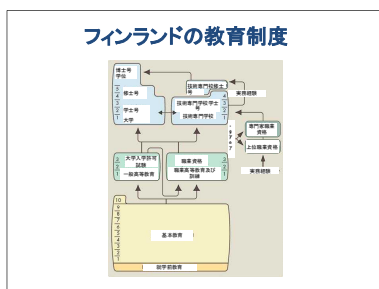
スライド 6 1



スライド 6 2



スライド 6 3



スライド 6 4

フィンランドの学校と大学(2012年12月現在)

■ 総合学校 (平均して生徒200名/校)	2644
■ 特別学校	110
■ 高等学校	381
■ 職業訓練校	164
■ 技術専門校	27
■ 大学	15

学校・教育機関: 3,350校以内
生徒・学生: 1,500,000人以内(人口は540万人)

スライド 6 5

財源/原則

- 教育の大半は公的資金によるもの
- 公的資金は、国と地方自治体の二層構造になっている

スライド 6 6

(スライド64) それではここから一部、フィンランドの教育制度についてお話しします。我々の国の制度は柔軟で、総合学校というのは義務教育です。15歳までの生徒が受けなければいけない義務教育となっています。その後は、職業学校なのか、又は一般高等学校なのかという選択肢があります。それぞれを卒業すると、大学に行くか、又は技術専門学校に行くかという選択肢があります。生徒はこの二つの道のうち、どちらを選ぶこともできるし、途中で変えることもできます。現在では、小学校、中学校の一貫教育校として施設一体型の校舎を構築する総合学校が、校舎建築の基本となっています。


(スライド65) フィンランドの学校と大学です。フィンランドは小さな国です。500万人しか住んでいない小さな国です。しかし、全ての子供たち、生徒、そして社会人教育を受けている人を含めると、150万人が何らかの学校に通っていることとなります。つまり、人口の3分の1が何らかの学校に年間を通じて通っているということとなります。フィンランドでは天然資源がありませんので、教育に投資をしなければいけない。これこそが我々の唯一の生きる道なのです。

(スライド66) 財源の原則です。ほとんどの教育については公的資金によるものです。ほとんど私学はありません。私立学校は10校ぐらいでしょうか。ほとんどの学校は公立学校です。そして、ほとんど大半は国と地方自治体の2層構造で資金供与されています。(スライド67) 国の負担分は地方自治体に提供されています。運営費の50%を少し下回るぐらいまでです。用途は特に決められていません。(スライド68) また、国は、地方自治体に対して、学校新設建築費の補助もしています。

国家の負担のプログラムについては、この数年の間かなり削減されてきました。100以上のプロジェクトがありましたが、今では財政が厳しく、18プロジェクトほどしか財源を確保することができないようになってきています。(スライド69) 財政措置の仕組みです。地方自治体

財源/運営費


- ・ 国庫負担は、生徒数、授業時間などの単位に応じて毎年決められる。
- ・ 国庫負担は、運営費の42%までをカバーする。
- ・ 国庫負担は、用途は特に決められていない。



スライド67

財源/建設費

- ・ 国庫負担は、学校の新設又は既存の学校の改修・増築に対して付与される。
- ・ 国庫負担の割合は、建設費の25-50%で、ほとんどの自治体が50%を受け取る。
- ・ 平均建設費用は、約2500ユーロ/正味m²(付加価値税)≒1800ユーロ/bi-m²(付加価値税)
- ・ 国の補助は、2013年-2015年は3,060万ユーロ=18プロジェクト(推定費用:6,240万ユーロ)



スライド68

校舎の財政計画は、国の制度に組み込まれている

教育省

- ・ 財政計画を立てる

地方政府

- 予算の適用をチェックし、優先順位を決める

地方自治体

- 地方政府に、予算申請とプロジェクトの計画を送る



スライド69



フィンランド国家教育委員会/学習環境開発プロジェクト
年3,500,000ユーロ以内

スライド70

Thank you !
どうもありがとうございました!



レイノ・タパニネン、M.Sc(建築)、建築家、SIFA

- ・ 1995年より、フィンランド国家教育委員会 主任 建築家
- ・ reino.tapaninen@oph.fi
- ・ +358-29-5331209

UBIKO - 21世紀に向けて学校を新しくする
http://oppimaisema.fi/7308&file_id=1293

スライド71

が申請と計画を地方政府に送って、地方政府でチェックをして、優先順位を決め、教育省が全国の財政の計画を立てます。(スライド70) 国家教育委員会では、地方自治体に対して毎年パイロット・プロジェクトや開発プロジェクトに資金を提供しています。学校建設のみならず、学校家具の開発、透明な壁の作り方などにも資金を提供しています。どのように学習環境を開発していくのかということに関わるプロジェクトです。

(スライド71) 以上で終わります。ありがとうございました。

司会：タパニネンさんありがとうございました。

講演

フィンランドと日本の 子供の行動を促す 環境と学校空間



マルケッタ・キュッタ 氏

フィンランド アールト大学

都市・地域研究センター 准教授

司会：それでは、次にアールト大学准教授のマルケッタ・キュッタ博士に御講演をお願いいたします。キュッタ博士は子供の行動研究について地理情報システムを通じた研究成果で2011年に卓越したWeb GIS研究者に送られるTechnology Innovation Award for Web GISを受賞されるなど、世界的な子供行動学の権威として活躍されています。今回は「フィンランドと日本の子供の行動を促す環境と学校空間」をテーマに講演をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

キュッタ：(スライド1) 御紹介いただきまして心から御礼申し上げます。すばらしいセミナーに御招待いただいて非常に光栄に思います。さて、私にとっては今回、3回目の来日となります。どうしてかと言いますと、実は私、今まで大学の共同研究、共同プロジェクトということで日本の方々と協力させていただいたからです。その中には木下先生も含まれております。

それでは、簡単に自己紹介させていただければと思います。私は環境心理研究が専門です。ただ、都市計画、建築で学位論文を書いております。なので、私は言うなれば、環境心理研究、そして、都市計画の両方に関わってきたということでありましょう。現在、私は土地利用計画ということで教えております。そういった意味では私は恐らく、世界の中で、心理学のバックグラウンドを持ちながら、土地利用をやっている非常に奇妙な例ではないかと思っております。

さて、私が属しております大学、アールト大学でございますが、実はフィンランドの最も有名な建築家、アルヴァ・アールトから名前が取られたものです。皆様御存じだと思います。アールト大学というのは、三つの古い大学、すなわち技術大学、芸術大学、そして経済大学がその前身となっています。今は新しいタイプの創造的な組合せということで、この三つの古い異なる部門を融合したものを作りあげています。私は自分の研究チームのトップを務めています。私どもは例えば、土地計画における人間的な側面、また、その設計における人間的な側面というものを研究しています。そして、チームには多くの専門分野のメンバーがそろっております。例えば、地理学者、そして社会学者ですとか、建築家などが同じチームに属しています。

さて、私自身の専攻というものがどちらかと言いますと建築ですとか、学校建築そのものというものよりは、都市計画に近いので、今日はもう少し全体像についてお話をすることができればと思っております。どういうことかと言いますと、例えば、環境を全体のものとして捉えたいと思っております。すなわち、環境全体がいかに健全な子供たちの育成に影響を及ぼしているかということの研究しているのです。やはり、私は学校の環境自体が子供たちの育成に必要なだと思っております。ヒラリー・クリントンさんがおっしゃったとおり、「村が子供を育てる」のだと思います。私に言わせれば、物理的な、そして社会的な文脈があってこそ、私は子供が育つと考えております。今日はそういったお話をしたいと思っております。そこで、その子供の社会と環境との関係性ということをつえたいと思っております。すなわち環境が、いかに子供のアクティブなライフスタイルの発展、ないしはその阻害に影響を及ぼすのかということを考えたいと思っております。

(スライド2) それではまず、フィンランドとそして日本の子供たちの日々の生活をちょっと比較してみたいと思っております。というのも私は、先ほど申し上げましたとおり、共同研究を今まで日本の方々と行ってまいりましたので、そういったバックグラウンドがあります。東

京大学の建築学科の研究チームの方々とも協力させていただきました。また、千葉大学の木下先生とも協力させていただいてきました。

さて、例えば物理的な環境が、いかに子供たちの積極的なライフスタイル、全ての年齢の子供たちのアクティブなライフスタイルの育成を促進することができるかという研究テーマですが、これは全世界で過去10年間、非常に関心が高まっている研究テーマです。どうしてなのでしょう。それは、アクティブではないライフスタイルがもたらす健康面での問題。例えば、先進諸国ではどんどん肥満の子供たちの数が増えている。そして2型糖尿病などの問題も出ているということで、やはり物理的な環境が、いかに子供たちがアクティブなライフスタイルを実行する上で貢献するのかということを考えなければなりません。例えば食生活だけとか、ないしは肥満の問題だけに目を向ければいいというわけではありません。環境全般的なものとして捉えなければ行けません。子供たちがそもそもどういった生活を日々送っているのか、そういったことも考えなければならぬのです。

そこで、ここでまずフィンランドと日本の子供たちが日々の生活によってどういった相違点、並びに共通点があるのか考えてみたいと思います。(スライド3) さて、木下先生が率いる日本の研究チーム、そして私の研究チームがある国際的な大型比較研究に参加いたしました。この中では子供たちがどの程度、環境における子供の単独行動ができるのかという比較研究で、最近行われた研究なのですけれども、16の異なる国々の研究者が集まってまいりました。そして、比較の対象となった主要テーマの一つが子供たちの一人での行動のレベルです。

一つの結果ですけれども、日本とフィンランドは、参加国の中で非常に子供たちの単独行動の率が高い。トップ2であったということです。ここでは小学校、中学校レベルの子供たちで、7歳から14歳ぐらいが対象となっています。第1位がフィンランド、次は日本です。ここで評価されたのが、親御さんたちが子供たちに対して、それぞれどの程度の単独の行動を認めているかということが測られているわけです。例えば、親に対して聞いたのは、子供たちは一人で学校から親の同行なくして帰ってくるのが認められていますか、ないしは学校から一人で例えば、趣味、学びごと、習いごとに行くことができますかとか、ないしは日が落ちてからも単独行動が認められていますか。そういったことを調べたわけです。そういった質問項目においてフィンランド、日本はトップ2だったのです。

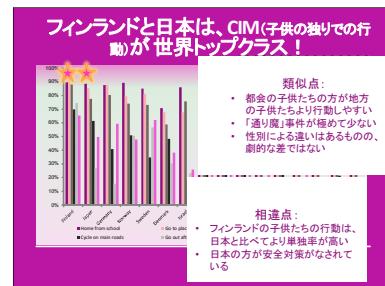
オーストラリア、ないしは英国などにおいては、フィンランドではどうして大半のあんなに小さな学童ですら、朝、親なくして一人で学校に通えるのか、下校もどうして一人でできるのか、冬で真っ暗な中、どうしてそれが認められているのか。朝だって暗いのにどうして



スライド1



スライド2



スライド3

可能なのかとよく疑問に思うようです。どうしてそうなのか、ちょっと説明が難しいのですが、後ほどお話をしたいと思っております。いくつか可能性のある説明はしてみたいと思います。ただ、フィンランドの場合、もしもフィンランドの子供たちが単独で学校に行くこと、たとえ7歳であろうと一人で学校に行くという伝統を考えるならば、やはり暗闇があることを認めなければならない。そもそもフィンランドでは冬は毎日朝暗いわけですから、認めざるを得ないのです。

また、この研究で一つ判明したのは、フィンランドと日本との間には共通項があるということです。例えば、この両国ともに都市部の子供たちの、やはり単独率が農村地域より高いということです。この結果には少し驚きました。というのは、伝統的に農村、地方の方が都会よりも子供たちにより優しい環境であると考えられていたからです。したがって、都会の子供たちの方が地方の子供たちより単独行動しやすいというのは驚きでした。また、いわゆる通り魔と言いますか、知らない人が呈するリスクはフィンランドでも日本でもほぼ存在しないということです。

すなわち、こうやって社会的な不安があるからこそ、親御さんたちは多くの国々において子供たちの単独行動を制約する。例えば、オーストラリア、イギリス、米国ではそういった不安があるからこそそうなのです。例えば、誘拐犯かもしれない、ないしは見知らぬ人が子供たちに襲いかかるかもしれない。その確率がいかに低くてもそういったことが、親御さんたちの頭にやはりこびりついている。したがって子供たちのために恐れているという状況なのです。

ところが、フィンランドと日本の場合はそのような現象は比較的まれです。両国ともに男の子も女の子も、若干ジェンダーの差が全くないわけではありませんけれども、そんなに大きな差はありません。例えばフィンランドの場合、女の子の方が男の子よりも認められている単独行動が低いと言われておりますけれども、でも、実は環境面では男の子よりも女の子の方が活発であるということが分かりました。

しかしながら相違点もあります。フィンランドにおける子供の単独率は更に高くなっています。すなわち、日本の子供と比べて、友達をも伴わない単独行動率がフィンランドの場合高くなっています。また、日本の方がより安全に対する関心が高い。すなわち、子供を守るための様々な取組が学校への通学ルートで取られています。例えば、見知らぬ人が呈するリスクは少なく、別にそういった事例がそんなに多くなくても、フィンランドと比べて、日本においてはやはり、それに対する懸念の度合いが高いようです。なぜそうなのかは分かりませんので、後ほど教えただければと思います。

では、どうして子供たちがいる環境において、一人での行動が認められることが重要なのか。(スライド4) 私は子供の一人行動の自由というのは、子供にとって優しい環境の中で非常に重要だと考えています。私の研究論文では、環境における、環境の子供に対する優しさというものを取り上げています。すなわち子供に対して優しい環境ということで、二つの次元をその中で捉えてみたのです。まず一人での行動が一つの軸。もう一つは、私が言うところの実現化されたアフオーダンスです。この実現化されたアフオーダンスとは、何を意味するのかご説明したいと思います。

アフオーダンスという言葉、これは、環境認識心理学、ジェームズ・ギブソン先生が発表されたものです。どういうことかと言いますと、我々一人一人の個人は、環境を異なった我々のアフオーダンスというメガネ、視点を通して捉えているのだと。それはやはり、例えば物

理的な特性であったり、身体的な特性であったり、人間としての自分の関心事であったり、過去の体験であったり。そういったものによって、我々一人一人、環境の認識が違うということなのです。また環境というものは、言うなれば、機能、社会、そして感情面でもそれぞれの人間にとって異なった可能性を秘めたものであるということなのです。

したがって、このモデルの中で私はこのように考えています。すなわち子供たちがアクティブに、積極的に環境ですとか、環境の中で機能する。そういった非常に高い度合いの単独行動率を示すのみならず、環境自体も子供に対して、非常に豊かな、多種多様な、可能性を秘めたものとして開放的であってほしいと思うのです。すなわち、一人一人にとって、本当にエキサイティングな環境としてあってほしいと思うのです。そこでこの二つの軸をこうやって合わせます。そうすると、理論的なモデルを策定することができます。すなわち異なるタイプの環境、その子供に対する環境としての優しさの度合いが違うタイプごとによって把握することができます。

一番上に「やかまし村」と書いてあります。これは本当の意味での子供に対して優しい環境ということを表します。すなわち、非常に高い単独行動ができるということなのです。そして、環境自体も非常にオープンで、豊かな環境面での魅力を秘めているということなのです。言うなればアフォーダンスです。なぜ私は子供に優しい環境をこのように「やかまし村」ということで表したのか。これは、アストリッド・リンドグレンが書いた本から取った言葉です。彼女は『長くつ下のピッピ』を書いた作家です。皆様この作品をご存じかもしれません。

彼女は、英語ではBullerbyと書いてありますが、騒がしい村『やかまし村』の物語も書いています。この村では子供たちが日々の生活の一部なのです。そして過剰にリスクから子供たちが守られていないのです。逆にやかましくても許される、そういった環境なのです。私に言わせればこれが理想的な子供に優しい環境なのです。他のタイプ、荒地、個室、ガラスの家、これは子供に優しい環境面ではどうしても妥協が伴います。ワーストケースは、個室です。子供たちの単独行動は大幅に制約されている。しかも、その環境が秘める可能性に、目を開くことすら許されません。日本の場合、いわゆる引きこもりという現象があるそうですね。引きこもりという発音でよろしいでしょうか。自ら引きこもって自分の個室にとどまっている。外に出ない。これはもしかしたら、この個室という現象の最も極端な事例かもしれません。

では、次にガラスの家の説明もした方がいいかもしれません。これは、ますます現代的な社会においてよく見られる現象となっています。これはどういうことかと言いますと、子供に対して、一見いろいろなことができるよ、という可能性を提示しているように見えます。



スライド4



スライド5



スライド6

ところが、子供たちはせっかくあるそのチャンスというものが親の監視なくしては手を出すことができません。ですから、言うなればガラスの家の中から、ということなのです。

例えば、屋外、外部の世界をインターネット、テレビのみで学ぶ子供たちのことを考えてみてください。ないしは、その乗った自動車の車窓から見たと考えましょう。こういった子供たちは、まさにガラスの家に住んでいるようなものなのです。そういった環境では子供たちは健全な成長を遂げることもできないと思います。そして、このガラスの家で育った場合は、積極的な社会の中において、アクティブな一員となることはできないと思います。この二つの次元、すなわち子供に優しい環境のこの二つの軸についてまた後ほど触れたいと思っております。

(スライド5) その前に、どうしてフィンランドの子供たちは、これだけ自由に動き回ることができるのでしょうか。世界の他の国々と比べてどうして自由なのかということを考えてみたいと思います。フィンランドの場合、いくつかの考え得る理由はあると思います。まず一つはインフラ自体が使いやすい。例えば歩きやすい歩道や自転車に乗るサイクルルートが整備されている。また伝統的に学校自体も、子供たちの自宅からそんなに離れていないところに建っている。ただ、昨今若干状況は残念ながら急速に変わっていますが。

また、そもそも学校の授業がそんなに長くない。すなわち、終業時間がそんなに遅くない。したがって子供たちは家に帰ってきて、相当程度長い時間、一人であるいは友人と過ごすことができるのです。そうなりますと、だからこそ子供たちが自分で単独で行動したり、友人と一緒に過ごしたりする能力に頼らざるを得なかったということがあるのかもしれない。歴史的に考えてみて、学童年齢の子供たちを抱えている女性は、働いていることが多いです。そうすると、やはり自分も働いているので子供たちが自立してくれることを期待するしかないのです。誰も学校から帰ってきて、子供たちの世話をする人がいないからです。

また、文化としても子供たちを信頼する傾向があります。すなわち、子供たちと彼らの能力を信頼する傾向がある。そして、子供たちに自分たちでちゃんとしなさいという責任を与えてきた。ただ、こういったことでも先ほど申し上げましたとおり、急速に変わってきています。ただ、個人的に言わせていただければ、これは非常に貴重な、フィンランドの社会の特性であると思います。すなわち、子供に優しい環境としての特徴だと思っています。

さて、正直言って日本においてどうしてこれだけ自由に同じく動き回れるのか、私はよく分かりません。どうして世界的に自由行動のランクが高いのか、理由は分かりません。これはよろしければ後ほどディスカッションできればと思います。

(スライド6) それでは、次に先ほど申し上げました子供たちの環境的アフォーダンスに話を戻したいと思います。このアフォーダンスというのが子供に優しい環境の中でも重要な二つ目の軸であります。御覧いただいている写真は、子供たちは天才なのだということを思い起こさせてくれます。すなわち、子供たちは環境におけるありとあらゆる可能性を生かす天才なのです。自分たちにとっては本当に興味深いと思うものをこつこつと使うのだと。彼らが遊び道具として使うのは必ずしも、そもそも遊び道具として導入されたインフラである必要はありません。この小さな子供は、私の同僚の息子さんなのですけれども、たまたまあったベンチで彼はこつこつと遊んでいるのです。ですから、環境面での可能性がある限りにおいて、子供たちは必ず、これで遊べるかどうかを考えます。私に言わせていただければ、学校という場におけるもの、すなわち、屋内外、全ての環境は遊びが可能なものでなければならぬ。子供たちが積極的にゲームだとか、遊びに使えるようなセッティングでなければ

ならないと考えています。

(スライド7) さて、私は自分の研究の中でこの、環境における遊びの空間を研究するためのある変わった方法論を開発しました。言うなれば、環境における遊びの空間には可能性がある、環境アフォーダンスがあるということをやっています。どういうことかと言いますと、実はチームのメンバーと一緒に、ある特別なインターネットベースの手段を開発いたしました。すなわち、子供に優しい環境におけるプレイスペース、遊びのスペースを基点として研究する方法です。これは一般参加型GISというものの一例です。GISというのは地理情報のことで、どういうことかと言いますと、例えば、それは子供たちの体験、行動に関わる情報、そして遊び場に関わる情報をインターネットのアプリケーションを使って集めたのです。このアプリはちなみに私どものチームが開発したものです。

なぜ遊び場の地理的情報が必要なのかということですが、私は強くこう信じているからです。すなわち参加型の設計、そして、企画をするためには貴重な質の高い情報をユーザーから取得しなければならないと思うのです。そして、それぞれの情報は特定の場所につながっていて、かつ、能力別に分類されていけば、それらは常にその特定の場所に特別な計画やデザインの解決方法につながっているということになります。だからこそ、その場所に関するより利用可能な有益な情報であり、これは企画する人、そして、建築家にとって有益な情報です。すなわち、特定の場所を企画する、設計する人にとって貴重な情報がこういう形で集まると思います。

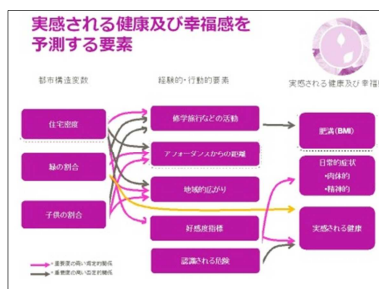
我々は世界の中で、このような手法を開発した世界の中でもトップ2のチームだと思います。聞いたところでは、オーストラリアの別の先生、ブリスベンのグレゴリー・ブラウン先生も同じような手法を開発したと伺っております。オーストラリアにおいてもやはり、景観ですとか、それから、エコシステムのサービスを評価する手法だそうです。この私のチームと彼のチームが世界の中でこの種の方法を開発した世界の中でもトップ2だそうです。私はこの方法を子供、若者だけではなく成人向けにも活用いたしました。そして様々なテーマについて研究を行いました。例えば、社会的に持続可能な都市環境ですとか、安全の計画。これはさっきタパニネンさんがおっしゃいました。

また、住民の日々の動き、そしてエコシステム・サービス等々についても、現在、ヘルシンキ市は私どもの方法を活用して、例えばヘルシンキ・マスタープラン策定のために情報を住民から集めているということです。フィンランドでは今やこれが、ユーザー情報を集める非常に重要な一つの手段となっております。

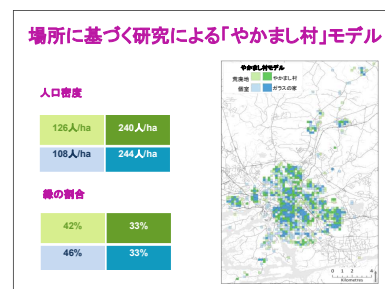
(スライド8) さて、この種の方法をもってデータを集めると、我々は非常に深い分析を



スライド7



スライド8



スライド9

することが可能となっています。すなわち都市の構造の可変性についてもとても深い分析ができました。それから経験的、行動的な要素、そして実感される健康及び幸福感など、非常に難しい複雑な関係性があります。このスライド全てをカバーすることはいたしません。

ただ一つ分かったのが、子供、そして若い人々の間では、実は、特に居住密度が高いほど、活発な学外活動ですとか、生活スタイル全般がよりアクティブになるということが分かりました。これが要するに、健康及び幸福感につながる。そして、その結果、肥満リスクが減るということですね。これは冒頭にも申し上げましたけれども、同じような結果が科学的に示されたということで、人口密度の高い都市環境がこのように非常に前向きな特徴を持っているようであると。すなわち、子供たちの、また若者のよりアクティブなライフスタイルを促すと。したがってその結果、健康もそして、幸福感も増すというトレンドがあるように思われます。

さて、我々が集めたようなデータを、(スライド9) すなわちソフトGISで集めた情報を分析いただきますと、様々な都市を全体として捉えることができます。そして、その町の異なる場所における子供に対する環境の優しさを見ることができます。トゥルク市の例ですけれども、フィンランドで第3番目の都市です。そして、この都市の異なる場所における、子供に優しいその環境の指数というものをこうやって御覧いただいております。いくつかの都市において御覧いただきますと人口密度が高い地域、日本の基準から言えば決して高くないのですけれども、フィンランドの場合はやはり、1ヘクタール辺り240人というのはかなり高い密度となりますが、人口密度が高くなりますと、子供たちに優しい環境ということにつながっているのです。

(スライド10) さて、それでは、この方法論ですけれども、日本でも行って見ました。3か国の比較研究ということで、日本、フィンランド、オーストラリアを比較してみたのです。

(スライド11) ここで私どもこのソフトGISのアプローチを使ってみました。御覧いただいているのは、ソフトGIS、オンラインアプリということで、これは日本の東京におけるデータ収集に活用いたしました。二つの地域に関わるものを集めてみました。

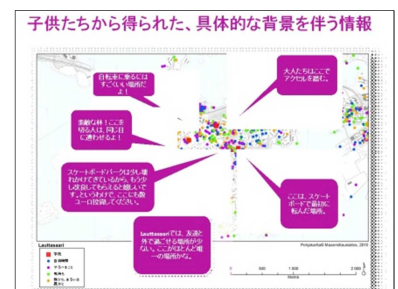
(スライド12) このような研究調査によって非常に背景情景に合った詳細な情報を集めることに有益でした。例えば、こちらで子供たちから集められたヘルシンキの都市圏におけるある地域から収集された情報、コメントです。子供たちは例えば、「すてきな林だ。ここの林を切り倒されたら同じ目にあわせるよ」と、あるいはここでは、「大人たちはここでアクセルを踏むのだ」と言っています。考えてみてください。安全な登下校をしてもらいたいと思えば、子供たちのためにこのような情報を収集して、最もリスクの高いところはどこか、最も



スライド10



スライド11



スライド12

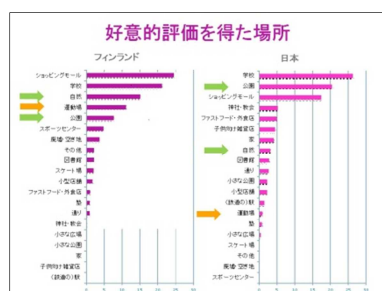
危険な道はどこか、ということが分かれば、子供たちも分かるだろうと。

(スライド13) 子供たちの評価によるアフォーダンスを地図上にマークしたものを、フィンランド及び日本における評価で比較すると、たくさんの相似点があります。両国において似ているところがあります。子供たちがフィンランド及び日本において好意的な評価をしたところ、例えば、学校を見てください。学校はかなりポジティブな、好意的なコメントを日本でもフィンランドでも集められたホットスポットと言えます。また、両国においては自然な環境、例えば公園、森林などが非常に重要な場所であることが分かりました。フィンランドでは恐らく、日本の子供達に比べると、純粋な自然にアクセスしやすいということもあるかもしれません。

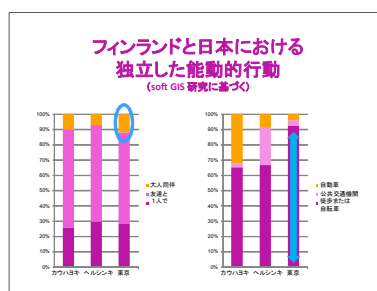
スポーツセンター、スポーツ施設を御覧いただくと、好意的なコメントをフィンランドの方が日本よりも多く集めたということが分かります。神社、教会の環境は日本では少し出ていますが、フィンランドでは全く出ていない。日本とフィンランドは類似点も相違点もあります。(スライド14) それから、別の切り口、一人での活発な行動をするかどうかということから見ると、フィンランドと日本における調査では、この国際的な研究で最初申し上げた調査ですが、そこでも同じような結果が出ました。例えば、東京では重要な場所に行くのは、よく大人の帯同を得る方が多いと。フィンランドは大人と一緒に行くことはより少ないということが表れています。はっきりとした違いは徒歩で、又は自転車で積極的に行くことができる場所のカテゴリ別の区分を見ていきますと、東京においてはより頻度が高く、徒歩、又は自転車でアクセスすることができる。ヘルシンキよりは多くなっているということが分かります。

日本の方々はこのような都市の環境、日本、東京における都市環境には誇りを持ってよいと思います。積極的な児童、また若者の一人の行動を促進します。非常に人口密度の高い都市化が進んだ環境ということを考えて、これは非常に興味深い、また重要な示唆であると考えます。(スライド15)ここでは子供たちに環境アフォーダンスについて、様々な場所に関するマーキングをしてもらったものです。ちょっと見づらいかもかもしれませんが、縮尺は同じです。学校近辺を表す同じサイズの丸で囲んであります。上が日本、東京で下がフィンランドになります。日本では子供たちのアフォーダンス、重要なアフォーダンスがあるような場所というのは学校に近いところに集まっている傾向が明らかになっています、フィンランドではそうではありませんが。

しかし、なぜなのかということとは分かりません。もしかしたら、フィンランドの学校に比べると日本では学校がもっと活動の中心、センターになっているのかもしれない。フィン



スライド13



スライド14



スライド15

ランドでも子供も自由時間を学校で過ごすことはできるのですが、日本の方がそうすることが多いのかもしれませんが。また、フィンランドにおいては子供たちがもっと学校から離れたところで活動の可能性を探ったり、又は交通公共機関を使って動き回ったりすることが、日本の子供たちよりはフィンランドの方が多いためからかもしれません。ここに挙げた日本とフィンランドの間における違いは、日本とフィンランドの日常生活のスタイルの中における子供たちの相違の数少ない例の1例を申し上げました。

Ph. Dのコースのオオミヤイチロウさんという学生さんがいるんですが、フィンランドと日本の子供たちの時間活用について調査をしております。2か国の子供たちの時間の使い方に大きな違いがあることに気付きました。フィンランドの子供たちは、より自由な時間が日本の子供よりも多いと言っています。確かに日本は学校の授業時間も長いかもしれないし、また塾に通ったり、語学学校に通ったり、ということが日本の子供の方がフィンランドの子供より多いことがあるというのが分かっています。

(スライド16) 最近、私のチームがこのようなツールを開発しました。ソフトGISの手法で、非常に使いやすいツールです。フィンランドだけではなく、世界中いろいろなところで使えるツールです。とても使いやすいインターフェースがあって、自分でソフトGISの調査をオンラインですることができます。コーディングも必要ないし、10分ぐらいで自分の調査を行うことができるというツールです。

このツールは世界各地で使われています。例えば、オーストラリア、ブラジル、ポーランド、ポルトガル、アメリカ、メキシコなどの多くの国で使われています。(スライド17) (スライド17) 最近ではオンラインのツール、住民から収集した場所に基づく結果を見ることができるようなものも開発されました。例えば、これは最近の調査で、ヘルシンキの首都圏において行ったものです。トピックは水関連の、水域関連のアフォーダンスです。子供だけが対象なわけではなく、成人も対象としています。これは最近行っている調査の例です。

御覧のとおり、ウェブベースの新しい参加型ツールの都市計画における活用を強く信じているものであります。(スライド18) このような手法をも使うことによって、都市計画だけでなく学校の学習環境において、個別の学校空間を評価するために活用できると思います。既に2005年にこのようなプロジェクトが開始されております。ティッコリラハイスクールとポイントというインターナショナルスクールの2校で生徒たちが学校をオンラインで評価しています。(スライド19) この2校は、大変興味深いものです。高品質の建築であるというだけでなく、例えば子供たちがどこが気持ちいい場所か、良くない場所か、いじめが起こるところだとか、待ち合わせの場所だとかいうことを校舎の中でコメントを入れることができるの



スライド16



スライド17



スライド18

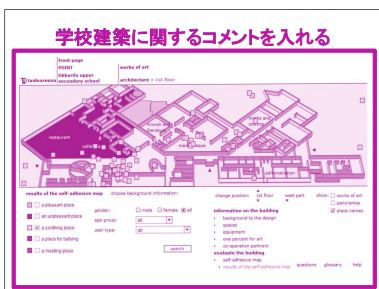
です。どんな建築家にとっても生徒に優しい校舎，環境を構築しようとする建築家にとっては，こういったコメントは全て価値あるものだと思います。

(スライド20) これらの学校ですが，極めてユニークな美術のコレクションを持っている学校でもあります。これらのアートは特にこれらのスペースのために制作されているのです。このアプリケーションは情報を生徒たちから集めるというだけではありません。学校のいろいろなところを使っているユーザーとしてのコメントを集めるだけでなく，こうした美術の作品について教え，その作品をどう思ったかということ，オンラインでコメントすることを可能とするツールです。

(スライド21) 最後になりますが，独自のオンラインでの展示を行うことができます。こうしたオンラインのアプリケーションを使うことによって可能になります。残念ながら，私が見る限り，体系的にユーザーの学校の校舎建築に関して，少なくともこのようなオンラインのアプリケーションを使って，利用者からのフィードバックを集めることはフィンランドではないのですが，しかし，近い将来には必ず行われると確信しています。

(スライド22) では，最後に一つ，もしかしたら二つ結論，コメントを申し上げたいと思います。(スライド23) もうお分かりのとおり，先ほどの発表にもありましたが，フィンランドのPISAの結果は少し低下しました。一方，日本の結果，成績は上がりました。スライドでは，まだ古いグラフでかつてフィンランドがまだPISAで第1位だったときのグラフを使っています。すみません。ここで何が重要かと言うと，フィンランドも日本も，両国ともこのグラフで言うと，ランキングトップの方に位置付けているということです。順位はちょっと変わっているかもしれませんが。

この学力の成績は，恐らく一部についてはフィンランド，日本が子供たちに対して高度の独立と身体活動を日常の環境において認めているという事実に基づくのかもしれませんが。



スライド19



スライド20



スライド21



スライド22



スライド23



スライド24

は次のように考えています。子供たちが独立していること、健康であること、そして十分信頼されていること、つまり、両親が必ず常に手をつかんでいなければいけないというわけではなく、子供たちだって能力はあるのだ、スキルもあり、そして社会に貢献できるメンバーとして、一人で積極的に環境のあらゆる可能性を活用していくことができると信じることは、子供の学力に悪い影響は全く与えないと思います。

(スライド24) 私が行ってきた学習環境のユーザー、例えばまだ小さい人たち、つまり子供たち、若者であったとしても、彼らからの情報の橋渡しのような活動についてお話ししました。彼らは、彼らが使っている特定の環境について多くの体験、経験、知見を持っています。それらの情報は、計画者及びデザイナーが、より良い学習環境を作っていくとすときに用いる基本的な情報になると思います。全住民の参加も極めて重要だと考えます。オンラインのツールを使って、参加型のプランニングをすることを、私自身が奨励してきましたし、私は自身でこのオンラインのツールのプロモーションをしています。参加型の計画及び設計でこれだけが唯一のツールだとは言いません。やはり面と向かっての会合も必要でしょうし、昔ながらの手法も使用可能だと思います。

理想的には、参加型のユーザー中心型の計画及び設計を行えば、特定のコンテキストに最もふさわしい教育施設を造ることができます。コンテキストに感応度の高いデザイン、計画においては、ローカルの文化、伝統を尊重する必要があります。子供たちや若者のユニークなニーズを尊重し、考えなければいけません。そうすることができれば、結果は最高のものが生み出せると思います。

司会：キュッタ博士、ありがとうございました。それでは、ここで休憩に入りたいと思います。再開は14時50分とさせていただきます。開会1分前にはご着席くださいますよう、ご協力お願いいたします。

講演

日本の施設一体型 小中一貫教育校の 建築



工藤 和美 氏

東洋大学 教授

シーラカンスK&H(株)代表取締役

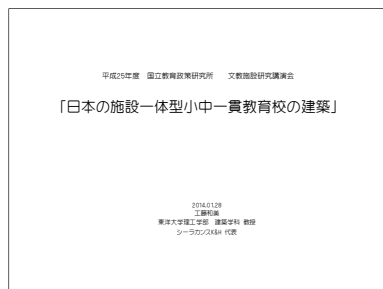
司会：それでは基調講演を再開させていただきます。次に御講演いただく工藤和美東洋大学教授は、設計事務所シーラカンズK&H株式会社代表取締役でもあり、平成20年に開校した富山市立芝園小中学校の設計を担当されています。また、現在文部科学省の学校施設の在り方に関する調査研究協力者会議や、首相官邸の国家戦略特区ワーキンググループの委員として活躍されています。本日は、日本の小中一貫教育校の建築をテーマに講演をお願いします。よろしくお願いたします。

工藤：(スライド1) 御紹介いただきました工藤です。よろしくお願いたします。先ほどからフィンランドの学校の様子について、タパニネンさんとキュッタさんからとても貴重なお話をいただきました。私だけではなく、恐らく聞いていらっしゃる皆さん方も同じだと思いますが、かなり共通の問題点やすばらしいいろいろなヒントをたくさんいただいたと思います。ありがとうございます。

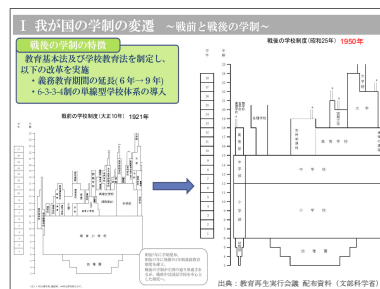
私の役割としましては、これから、日本の小中一貫及び連携学校のスタイルというのがまだ日が浅いので、日本の教育を少し遡りながら教育システム変遷を最初に少しお話しさせていただいて、その後で私に関わった、施設一体型の連携校についてお話をし、そこに行き着く過程においての日本の教育というのはこういうふうなことをテーマにいろいろ変化して、今はどういうふうな施設計画が進んでいるかという辺りに少し話を広げて終わりたいなと思っておりますのでよろしくお付き合いの程お願いたします。

(スライド2) これは、日本の方々にとっては当たり前のことかもしれませんが、日本の教育というのは戦前戦後でいろいろ変わってきています。その大きな変革期というのがここにあります1950年の学校制度というものができたときに大きく起因しています。先ほどのフィンランドのケースでは、最後にお話があったように、ちょっと小さくて見づらいですけども、このような制度は9年間、次に6・3・3・4制というのがこういうふうな形で整ってきたという歴史があります。

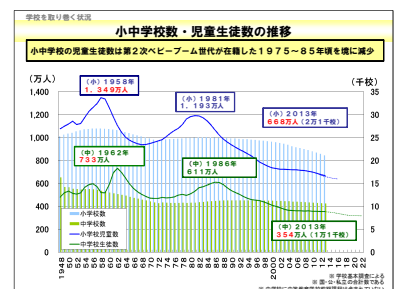
(スライド3) 今、日本の学校施設は大変な建て替えの時期にきています。いろいろと手を入れる時期になっている最大の原因というのは、第1次ベビーブームの1958年には小学生の生徒数1,349万人で、2013年には668万人というふうに半分近くになってきているという状況です。これは中学校も同じです。この733万人が354万人となり、この50年間で半分になってきました。この棒グラフが施設の数です。つまり、これだけの生徒数を預かってきた学校がみんな古くなってきて、それを建て替えるのか、手を入れて継続して使っていくのかという大きな岐路に立っているということです。



スライド1



スライド2



スライド3

生徒数がこんなに減っているのに、学校数はそんなに減ってないなと不思議に思うかもしれませんが、実は生徒数が最大だった頃一クラス80人だったということを知っています。今、日本の学校は都心部だと25人ぐらい、あるいは30人学級も増えています。一クラスにおける生徒数がどんどん変わってきて何とかがんばっているところなんです。こういった歴史があるということをまず踏まえて、ちょっと見ていただければと思います。

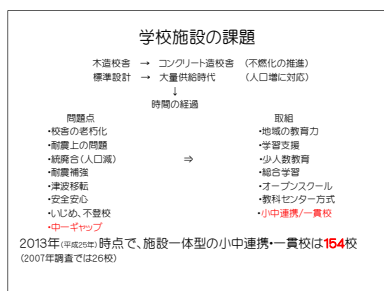
(スライド4) このように人口が急増したときに、大量に学校を造らなくてはならないということがあって、同時に、木造だった学校を不燃化するというでコンクリート造にしてきたという歴史があります。その大量供給の時代の学校が今、同時に改修しなくてはならない時期に差しかかってきたということが一つあります。

それ以外にも様々な問題点があって、日本はやはり地震が多く、常に耐震上の問題を抱えています。今回の津波のことも新しい考えを持たなくてはなりません。それ以外にも安全・安心の問題、いじめの問題、それから小学校から中学校に上がる時の「中1ギャップ」という言われ方をしておりますけれども、中学校と小学校をどうつなげていくかなど、そういった問題に対して私たちは教育のソフト面、ハード面で様々なことをやってきました。地域の教育力を取り入れたり、少人数での教育、総合学習をやったり、オープンスクール型という開いた形での教室配置をしたり、教科センター方式を導入したり、そのような流れの中で今、小中連携あるいは一貫校という学校が全国で作られ始めています。

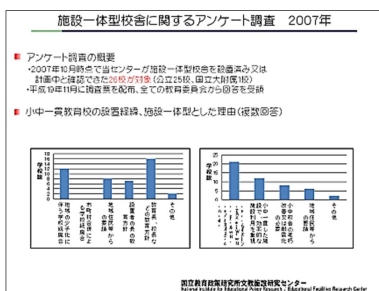
2013年の時点では、154校というのが調査結果になっております。その、154校に対しての調査を今正に文部科学省が調査を行っているところですが、(スライド5) 実は2007年にその時点で完成していた26校に対してのアンケート調査を行っています。その状況というのは、これは国立教育政策研究所の方からデータを借りて、お話をさせていただいているのですけれども、いろんな理由でなぜ小中を一緒にしてきたかということの理由がここに書かれています。(スライド6) その中でやはり、学年の区分をどうするかというのが当初迷っているというか、いろんなタイプがあって、4・3・2制だったり6・3のままだったり、3・4・2に変えていったりということで、一貫か連携かということに迷っていたようですが、この調査の段階では63%が4・3・2制を取っているということになっております。

場所はどこかということ、多くの場合中学校に、近隣の二つ三つの小学校が集まってくるということもあって、中学校の敷地に校舎を建てているケースが多かったという状況が分かります。(スライド7) 様々な新しい制度を使って特殊ケースとしてやってきていたのが今の現状です。

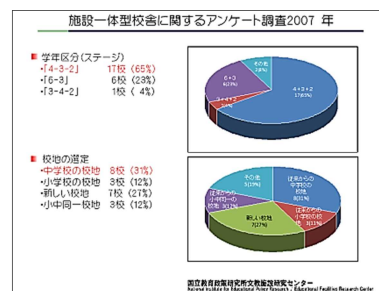
(スライド8) それではその小中連携や一貫を行った学校でアンケートを取ると、大半の人



スライド4



スライド5



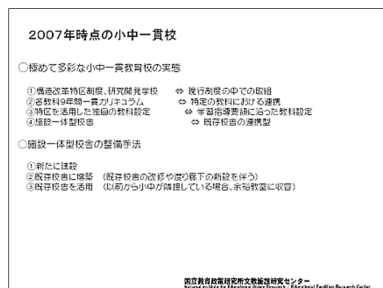
スライド6

たちが「成果があった」ということを、96%の人たちが「良かった」というふうに言っていて、その内容はどういうことかということこちらに書かれていますのだけれども、(スライド9)指導上の効果がいろいろ挙げられています。ここにちょっとピックアップしておりますけれども、例えばいろんな問題行動が少なくなった、あるいは小学生の英語の教育に中学校の先生が入ってきてくれて良かった、あるいは小学校と中学校の児童の交流が生まれて非常に良かった、主体的に活動するようになった、ということがメリットとして挙げられております。

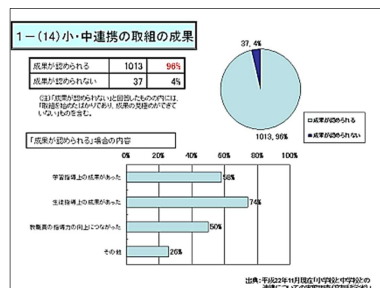
(スライド10)逆に問題点ですが、いいところばかりではなく87%の学校でやっぱり課題があるというふうに答えられています。(スライド11)その中で一番課題として多かったのは、中学校から小学校の方へ向かって授業を出前することが多くて、中学校の先生が大変だという御意見がありました。校舎が一体になっていなくて近隣の小学校と連携している場合ですと、やはり移動するのに時間が取られるということから、なかなかそこはスムーズにいかないということがあります。また、小学校の卒業後、中学校は様々な選択がある校区では、その小中の連携というのが直接生かされなかったというような、こういう御意見も課題としていただいております。

(スライド12)そういうこともあります、連携をした上でいろいろな工夫というのもされていて、小中の授業の研修会をやったりとか、あるいは日本独特ですけど運動会、文化祭という、そういうものを合同でやったりということが良かったという現状です。教育委員会へのアンケートではコーディネーターを配置することによってスムーズに移行されていったというお話も伺っております。

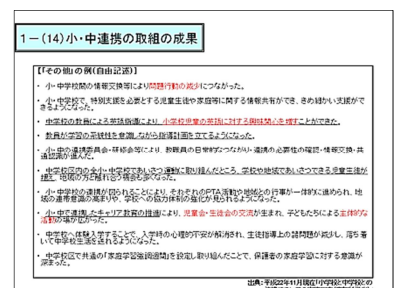
(スライド13)今の調査は2007年時点で、まだ26校に対しての調査でした。今現在154校に対しての調査が終わり結果をまとめているところで、残念ながら本日はまだ発表できないのだけれども、是非お二人にはまた御報告をさせていただければと思っています。



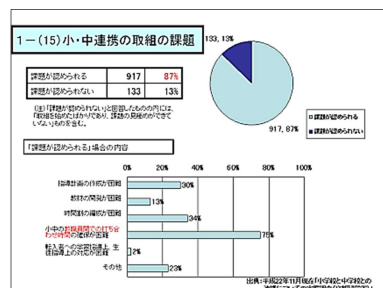
スライド7



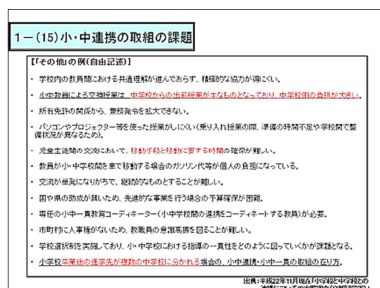
スライド8



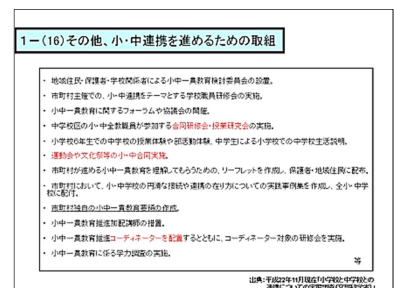
スライド9



スライド10



スライド11



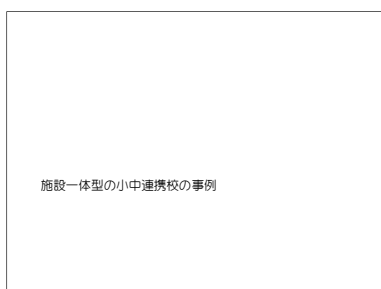
スライド12

それでは、今のようなお話を私なりに理解して、私が携わった学校について、事例を用いながらお話をさせていただきます。

(スライド 14) これは 2008 年にしゅん工しました富山市立芝園小中学校といます。この小中学校は PFI 事業で行っておりまして、事業者と一緒に私もチームの一人としてこのプロジェクトに参加しました。そのときに作りました大きなコンセプトは、「9年間の旅」をデザインする、つまり日本ではまだ9年を同時に見て、学校計画するということがとても少なく、私自身の経験でも、小学校の6年は長かったなと思うものですから、9年ってすごく長いと感じました。小さな子供からもう大人に近い中学3年生と一緒に生活する、人生の中である種の旅じゃないか、育つ旅じゃないかと考えて、旅を一つのテーマにしてこの学校を設計しました。

富山というのはフィンランドに近いかもしれないです。雪も降るし日本の寒いところです。そういう気候風土もこの建築に大きく影響しています。(スライド 15) これはもともとあった中学校の敷地にやはり小中学校の連携校を建てました。つまり日本の中学校はグラウンドがすごく広くて、ここでクラブ活動をやります。もともと中学校しかなかったところに小学校も入ってくるわけですから当然、学校敷地が大変狭いということになるわけですね。それでそこをどう工夫して建てるかというのが設計者は大変つらいことで、知恵を出さないといけないことになります。

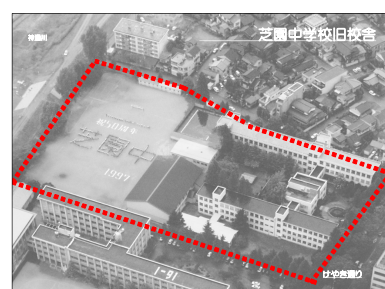
(スライド 16) 我々が提案した最大のポイントは、川がこう流れていて、川に向かって大きなきれいなケヤキ通りからスーッと視線が抜けていきます。校舎は、小学校と中学校がこの9年間をお互いにつながって、一緒にここで学んでいるという姿を作りたい。今まで小学校と中学校は別々だったものが一緒になっていくというのを、建築の配置からそれを感じるようにしたいということから、パサージュ、みんなの広場、アトリウムというのが貫いてい



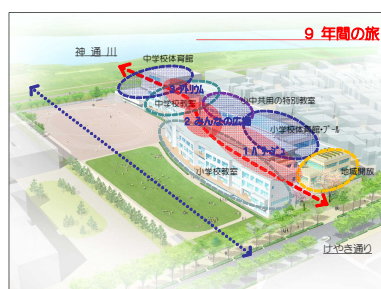
スライド 13



スライド 14



スライド 15



スライド 16



スライド 17



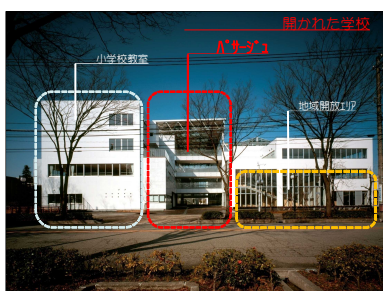
スライド 18

ていて、小学校、それから小学校の体育館関係、地域、それから共用部分、中学校の部分、(スライド 17) そして最後は中学校の体育館というのが一連の流れになるような校舎を考えています。

(スライド 18) 小学校は天然の芝のグラウンドになっていて、(スライド 19) これが学校の顔で、けやき通りからのメインアプローチから見たところですけども、ここにパサージュというスペースがあって、半外部になっています。雪の多い富山ですので、雪の降っている冬場でも外で子供たちが遊びたいというのが学校の先生や、地域の人たちからの御意見をいただいたところなんです。それを実現しています。と同時に先ほど活動の場が地域にも見えるということが大切だというお話をさせていただいたのですが、地域開放のエリアを前面に持ってきて、その活動が地域の人たちとともに子供を育てていくという姿として見せたいと考えました。

(スライド 20-21) 朝学校に来ると小中学生と一緒に通って行くパサージュになっています。ここではいろいろな学びや遊びが行われていて、(スライド 22) このように、朝、中学生と小学生がみんなで挨拶運動をやってます。天気がいい日はもっと外に出ているのですが、ここで、先生や生徒たちが一緒に迎えている様子です。

(スライド 23) 反対側から見た、これは小学校と中学校を結ぶブリッジがあります。そのブリッジの部分から見た様子ですけども、こういうふうに自分たちが生活している場所を見返すことができるというのが大切なんじゃないかと思っています。ここに、今子供たちが集まっていますよね。これは何かというと、先ほどお話にもありましたけれども、子供たちは例えば遊びを作ります。キュッタさんにも聞いてみたいのですが、これはベンチでも子供の遊具でもないのです。ただのボールです。だけど子供たちはベンチにもします。遊び物にもします。(スライド 24) こんな感じです。ちょっと大きいボールですけど FRP で



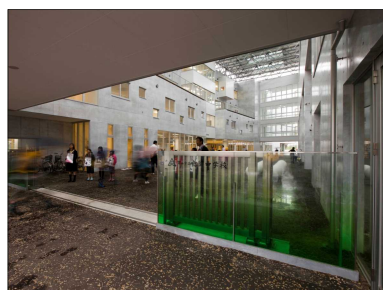
スライド 19



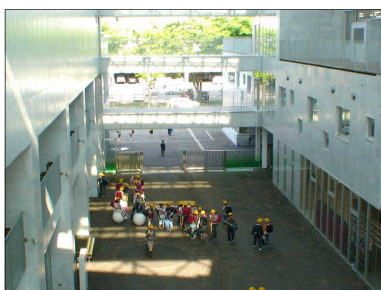
スライド 20



スライド 21



スライド 22



スライド 23



スライド 24

できていてジャンプしても大丈夫。こういうところが大好きなのですね、子供たちは。

今はたまたま小学生の絵ですけど、これは小学生がいるときに中学生が「どけ」とはさすがに言わないわけで、でも小学生がいないと中学生がどんどん来てここで遊んで、同じなのですね、子供たちって。こういうちょっとした「やどり木」的なものが実は子供たちの心にとって大変重要だというふうに私は考えていて、ちょっとした取っかかりみたいなポイントを学校に作るようにしています。

(スライド 25) これは学校の断面を切ったところですけど、日本の学校は体育館がとにかく大きい。小学校も中学校も体が違うし行事も違うから、大きな体育館を必ず二つ造れと言われていつも大変苦労するのですが、大きな施設が死角になるので、ここでは少し沈めています。地域からもお互いに見えるように、いろんなところから見えるような工夫をしています。この学校は免震構造を採用していますので、特殊な構造体になっています。地震が来ても自然に自分たちで揺れを止めていくような装置が作られています。

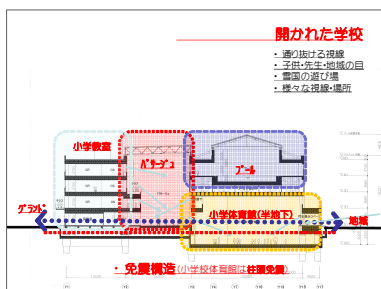
このパサージュを介していろんな活動が見えてくる。上にプールも乗っています。後ほど映像でお見せしたいと思います。体育館があります。周りの地域から学校の施設を通して学校のグラウンドまでずっと視線が通るようになっていくという工夫をしています。

(スライド 26) これがその様子です。つまり学校はすごく大きい施設になるので、それが建つことによって、地域の人たちはすごく分断されたという意識が生まれるので、そうではなくて学校の要素も地域の要素の一部になるようにということで、こうやって隣の高校まで見えるような窓の位置、配置を考えているし、先に下校する子供たちが上の学年の児童たちの様子を見ることもできるというふうな工夫をしています。

(スライド 27) 教室の中では、教室単位の扉がなくて、フリースペースと教室が一体的に使えるようなものをオープンスクールという言い方をしています。この小学校はオープンスクールを採用しています。寒い地域なので、蓄熱による暖房機があって、どこもオープンな部分も教室も同じように暖かいという状況になっています。

(スライド 28) 教室配置はここで見ていただくと分かるのですが、センターにティーチャーズ・コーナー、先生のコーナーと教材関係の共通部分があって、一つの学年、もう一つの学年、トイレ等があり、水回りがあって階段があります。2 学年が一つのユニットになっていて特別教室ゾーンや中学校とつながるような形になっています。これが教師コーナーでここから全体が見渡せます。

どうしてもこれだけ大きな教室になるので、もうちょっと子供たちにとっての小さな場所というかインティメイトな、もっと小さな場所というのを設ける必要があって、こういうポ



スライド 25



スライド 26



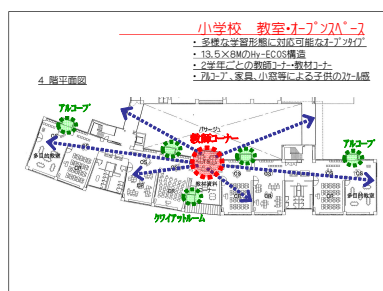
スライド 27

イント、ポイントでアルコーブというのを作っています。日本では特別支援学級だけではなく、普通教室に様々なハンディを持った子供と一緒に勉強します。そうすると、そういう子供たちがちょっと休憩したいけれど、みんなの教室から離れたくない。先生も授業を進めながら、そういう子供のケアもしなきゃいけないというときに、(スライド 29) こういったインティメイトなスペースが大変よく利用されているということ、現場の先生たちからたくさん聞いています。ちょっとカーペットのコーナーがあったり、少し段の上だった場所があったりというのが、大きな学習スペースの中に散りばめているようになっています。

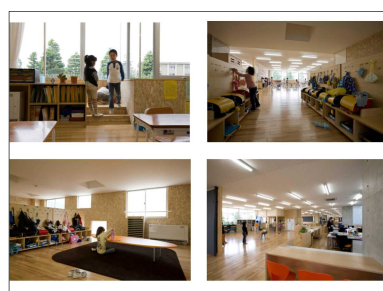
(スライド 30) これは教室の内部の様子です。できたての整然としてまだ展示もこれは余りしていない様子ですけど、教室にそれぞれいろいろな道具があって授業をここでスタートする様子ですけども、(スライド 31) これが先ほどあった小中連携の一つの出前授業です。英語の中学校の先生がギターを持って小学校に来て、子供たちに英語を教えている様子です。そうすると2人のティーチャーが協力しながら、映像も見ながら子供たちと英語の歌を歌ったりしながら勉強をしている様子です。日本全国こういう様子が今、見られると言えます。

(スライド 32) 例えば国語の時間ですが、これは、芝園の小中学校の先生からお借りしたスライドですけども、共同で授業を行っています。この場所は柔剣道場です。少し広いところを使いたかったためです。かるたをやっているところです。それから保健の授業を中学生が小学生に、先生と一緒に教えるというようなことをしています。(スライド 33) どうでしょう、毎日の生活の中でお互い学校の教室に入って行く様子を見ながら、全く知らないでもない、ちょっと知っているお兄ちゃんお姉ちゃんたちが来て授業してくれるというのは、子供たちにとって次のステップに上がって行くときに非常にスムーズな流れを作っているというようになっています。

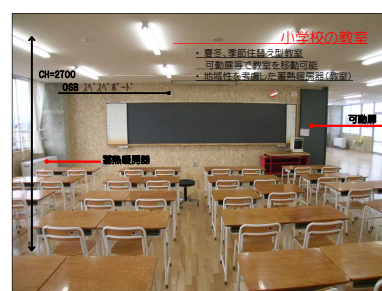
(スライド 34) これは日本の教師たちが集まっている職員室と言われるところです。私も



スライド 28



スライド 29



スライド 30



スライド 31



スライド 32



スライド 33

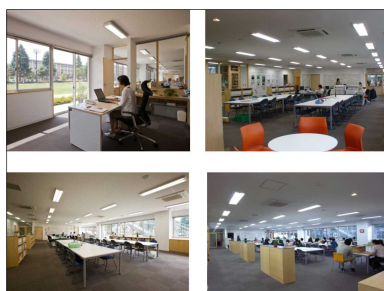
海外の学校をいくつか訪れていますけれども、日本の職員室はすごく広いと思います。教室にあるベース以外にもたくさんこうやってスペースを持っています。ただ、小学校の場合は担任制なので昼間ほとんどいなくて、放課後や朝に集まっています。それでこれをフリーアドレス制にしている、自由に授業の準備に使ってもらえるようなシステムにしているケースです。

(スライド 35) ラウンジです。ここは小中学校の会議室であったり小中学校共有のラウンジがあって、先生たちが小中連携していくときにいろいろな話をしたり、親御さんと話をしたりという場所です。先ほどランチルームの御紹介があったのですが、こういうラウンジを持ってきて、そこでいろいろなコミュニケーションを取るといって、そういうスペースとして使ってもらっています。

(スライド 36) この学校の真ん中、この地図で言うと、ちょうどパサージュを入れてきて中央が外になっています。この部分が「みんなの広場」というところで、ここから奥が中学校になっています。時計台があって展望台になっていて、立山連峰という富山のとても美しい山々が見える、いい場所になっています。

(スライド 37) これはインドアの、内部の大階段になっています。この大階段があって吹き抜けを介して中学生が3フロア、2階、3階、4階を使っています。1階が管理諸室です。ここで様々なことがお互いに見合えるというような仕組みになっています。

(スライド 38) プランニングではこのようになっています、普通教室が南側に並んでいます真ん中に多目的教室を介しますけれど、先ほどのオープンスクールからこの中学校に来て、それがスムーズに馴染むようにということで、普通教室と合わせてオープンスペースを持っている中学校になっています。アトリウムの反対、北側に特別教室があります。生徒はここで授業を受けるときもあれば移動して行ってこちらで特別教室での授業を受けることもあり



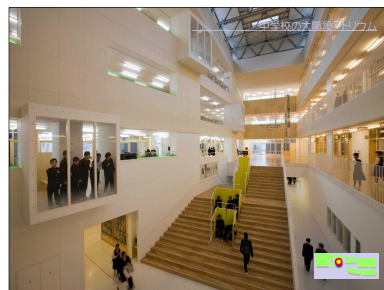
スライド 3 4



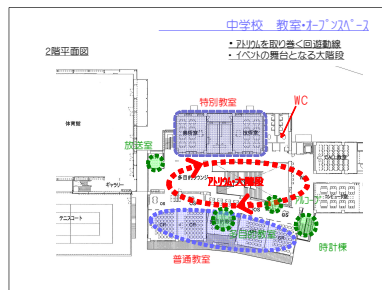
スライド 3 5



スライド 3 6



スライド 3 7



スライド 3 8



スライド 3 9

ます。それ以外に実はここがすごく重要で、ここにトイレがあります。そうすると授業を受けていても必ず1日1回か2回はこちらに回ります。回るということはすごく大切で、お互いがよく見えるということです。(スライド 39) つまりこの絵がそうですけど、反対側に行くと上の学年、下の学年の様子がよく見えます。先生たちもほかの学年の様子が見えているので、学校全体で何が起きているかということを、生徒同士も先生も把握しやすいという、そのようなやり方になっています。

(スライド 40) これが中学校のオープンスペースの部分ですけども、(スライド 41) セミオープンになっているので、こういう形で授業の間にちょっと休憩したり、授業をここで展開して一人ずつ順番に呼んで先生が個別指導していたりと、様々な使われ方をしています。

(スライド 42) その中でも私は、教室、クラスルームを離れて友達と話をする場所というのはすごく大切だと思っていて、カウンターみたいなもので、先生と生徒、あるいは生徒同士がクラスという単位を越えて話をする事で、実はすごく生徒たちの人間形成で大切な場所だと思っています。

(スライド 43) これはちょうど反対側から全体の様子を見たところで、こういうところでお話をしているという様子がよく見えてきます。(スライド 44) この小中学校では非常にいろいろな、連携の指導をやっていまして、2008年ですからもう6年になっています。これは合同の音楽会ということで、中学生の吹奏楽部が演奏をして、隣からやってきた小学生、あと中学生がみんなでアトリウム周りから聴いているというイベントをやっていまして、いろいろな使い方をしてくれています。

(スライド 45) 例えばこれでは、卒業式のフィナーレに使っていただいている、卒業生が真ん中を歩いてきて、両脇を在校生が囲んで拍手して送っています。私たちはここでしゃべったりするぐらいのことを設計のとき想像していたのですが、これは先生たちがこの場所を



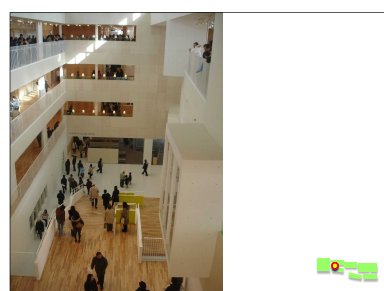
スライド 40



スライド 41



スライド 42



スライド 43



スライド 44



スライド 45

上手に使っている様子です。私たちはこれを見せられて「ああこんな使い方もあるんだ」というふうに学んだ次第です。

(スライド 46) 最後、このアトリウムの階段を降りてきたところに実は鐘があります。この学校の校歌の最後に「自立の鐘を打たんかな」とあります。つまり自立の鐘を鳴らして卒業というか、一人前の人間になっていくのだという校歌があったので、これは設計段階から「自立の鐘はどこに置くんだ」という打合せをして、最後「じゃあ、出て行く場所にこの鐘を掛けるようにしましょう」ということで計画した事例です。

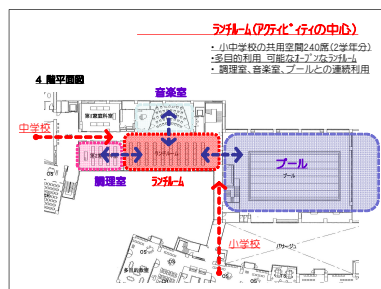
(スライド 47) もう一つ、先ほどフィンランドの例でもランチルームがすごく重要だということをおっしゃっていただいて、この学校でも1階ではないのですが、4階にランチルームがあります。ランチルームはプールと家庭科室、音楽というのがセットであります。それはいろいろな使い方ができるようにということで、小学校、中学校の両方から非常に来やすい位置にあります。(スライド 48) これはランチの時間に食育について栄養士さんがレクチャーしている様子です。これは小学校と中学校のリーダーの合同会議ということで、いろいろなことに使ったりここで音楽会を開いたりということで、様々な使い方をしています。

(スライド 49) 最上階にプールがあって、このプールは屋根が開くようになっているので、夏場はすごく気持ちいいです。ここから立山連峰のビューがあるので、まるでホテルのように大変すてきなプールになっています。(スライド 50) また、冬場には屋根が閉まって、日光さんさんのぽかぽかルームで、ここで子供たちが様々な学習をしています。

(スライド 51) その下の階にはメディアセンターがあって、ここも大変重要な場所になっています。出来上がってから何度も私は学校に行って、先生方にどういいうスペースが有効だったかとお伺いするのですが、このメディアスペースが本当に小中連携で良かったとのことです。(スライド 52) つまり本は学年によって切れないので、子供は小学生でも中学生の



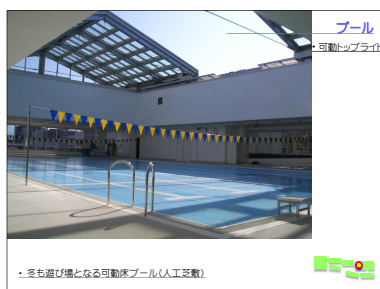
スライド 4 6



スライド 4 7



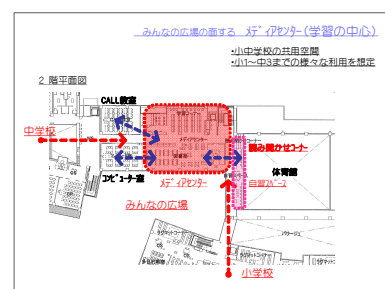
スライド 4 8



スライド 4 9



スライド 5 0



スライド 5 1

本をどんどん読める子もいれば、中学生でもまだ小学校の本の方が読みやすい子もいます。だから自分の読解力の能力に合わせてチョイスできるととてもいい場所です。これは中学生が小学生に本を読んであげている様子ですね。これが日常的です。もう普通に小中学生が一緒に本を読んでいます。こういうことが自然に生まれます。だから図書館は小中連携で大変重要だと思っています。

(スライド 53) 最後、この地域エリアには、(スライド 54) 階段状のシアターがあります。授業でも遊びでもイベントでも使いますが、(スライド 55) この下に「語り部の部屋」というのがあって、地域の人たち、お年寄りたちがここに来ていろいろお話をしたり展覧会をしたり、正に地域の人たちが交わることができるような場所を作っていて、盛んに使われています。

(スライド 56) プロセスは重要で、これだけの施設が突然できたのではなくて、作っている途中で何度もこうやって大きな模型を持って行って、子供たち、先生たち、教育委員会の人たちと何度も何度も打合せをしながら理解してもらって、かつ出来上がる夢を持ってもらって取り組みました。(スライド 57) これは、ペンキ塗りのワークショップをやりました。当時の小学5年生たちとペンキ塗りをやりまして、(スライド 58) このように図工教室の壁にこのカラフルなペンキのウォールを作りました。実は、昨年中学校に呼ばれて、このワークショップをした子供たちがちょうど卒業するから講演をしてほしいということで伺ったのですが、みんなもう立派な中学生になっていて、この話をしたらみんな大変喜んでいました。

(スライド 59) あとは、学校と地域との境界線というのが、先ほどセキュリティの話もありましたけれど、私は断絶するのではなくて、やっぱりこれは大変重要な接点であって、地域とともに子供たちの安全を守っていくためにこの境界の作り方が大切だと思っています。



スライド 5 2



スライド 5 3



スライド 5 4



スライド 5 5



スライド 5 6



スライド 5 7

また後ほども出てきます。(スライド 60) 子供たちが外に出て行って、ビューティフルプロジェクトという、地域のゴミを小中学生の子供たちが一緒に拾って、地域の人と一緒にきれいにする活動をしています。(スライド 61) こういう活動によって地域の中でも大変大切な小中学校となって存在しています。

以上が小中連携校ですが、ここに行き着くまでには様々な課題がたくさんあったので、三つほど事例を出しながら話をまとめたいと思います。

(スライド 62) 日本の小中学校の建て替えに拍車を掛けた要因として、学校の統廃合というのがあります。人口が減ってくるのに合わせて適正規模に学校を減らして集めるという作業を日本中でやりました。私は 2001 年しゅん工した大都市のど真ん中、「学校はまち、まちは学校」というコンセプトで福岡市の博多小学校を設計しました。(スライド 63) このような大都市の中心部の四つの小学校を一つにしました。既に統廃合したもう一つ中学校が一枚ありました。後にこの中学校は連携校として、博多小学校と連携授業を 2009 年からモデル校としてスタートし、今、福岡市ではこれがモデルとなって定着しています。

(スライド 64) こういう大都市ではコミュニティーが薄いかと思うと、意外に濃い。歴史あるお祭りを中心にすごく強いコミュニティーがあって、そういうものを一つのチャンスと捉えていろいろなことをやっています。「福岡スタンダード」というのがあって、小中学校のギャップからジャンプというふうにタイトルを作って、中1ジャンプを目指す、あいさつ、掃除、自学、立志というこのテーマの下に小中学校の連携を始めています。

(スライド 65) 大都市の中にありながらここも塀がなくて、学校の中の様子が見えるようになっています。中央は校長先生ですけど、朝、子供たちを迎え入れています。(スライド 66) 大きな通りから学校の体育館や学校の様子が見えます。もちろん勝手に入るわけにはいかないのですが、様子がよく見えるというのは、お互いによく見えてくるということ



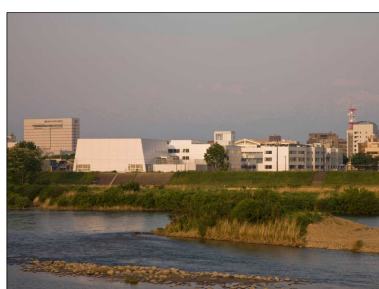
スライド 5 8



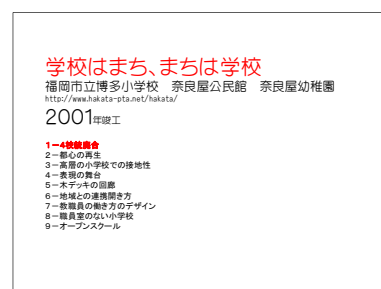
スライド 5 9



スライド 6 0



スライド 6 1



スライド 6 2



スライド 6 3

です。

(スライド 67) この場所では様々なイベントがされていて、昨年の 10 月に行ったとき、このような大きなイベントもしていました。子供たちの楽しい活動が地域に見えることによって、地域の人も子供たちの教育、子供たちの安全に対して、自分たちのこととして捉えてもらえるということが大切だと思っています。日本でも 2001 年の、この小学校ができた直後ですが、大阪教育大附属池田小学校で児童殺傷事件が起きて、尊い命が奪われたときにも、やはりこの「地域と一緒に守るんだ」ということをこの地域の人たちが言っていたので、この開かれた学校というスタイルをキープしていただいています。

(スライド 68) 敷地内の公民館から見たグラウンド側の様子です。狭い敷地でしたから 5 階建てになりました。日本の学校はだいたい 3 階建てや 2 階建てぐらいが多く、5 階にしなければいけないということは大変難しかったし、悩みました。そこで、階段を通して出入りする。なるべくアウトドアに、外に子供たちが出やすいように、昇降口が全フロアにあります。外に出てグラウンドで遊べるようにという環境をキープしています。(スライド 69) 高層の建物なので、第二の地盤面としてのデッキを配置し、見通しが良くて安全にということを考えました。(スライド 70) あるいは教師コーナーからそれぞれのクラスがよく見えるようにという配置をしています。(スライド 71) その間にこのような小さな場所があって、子供たちはここが大好きです。(スライド 72) 教室はこのような形で、先ほど一方向を向いていた教室の机のレイアウトがありましたけど、こういうコの字にしてお互いに見合ってお互いに育て合うというようなやり方をやっています。

(スライド 73) 次に今度は中学校です。中学校ではどういった新しい試みを日本でやっているかという、紹介するのは坂井市立丸岡南中学校という、教科センター方式を採用している中学校です。(スライド 74) もともとプロポーザルコンペティションだったのですが、敷地はこういう田園地帯で集落がポツポツあるようなところだったので。なんのコンテクス



スライド 6 4



スライド 6 5



スライド 6 6



スライド 6 7



スライド 6 8



スライド 6 9

トもないところに学校を建てるというのは設計者にとって難しいのです。(スライド 75) 実は、春はいいけど冬はこのように雪の中にすっぽりという状態になる日もあります。そしてまた春が来るという厳しい環境にありました。(スライド 76) 学校の周りは田んぼですので、すごく美しい水があってこれを校地に引いていただき、生徒がここを自転車で通ってくるというプロムナードをまず作りました。もう一つはこの 130 メートルの 60 メートルの大きな基盤状のものがあって、この突起が出ているところは体育館になっています。この中を自由に生徒たちが動き回って授業に行くというスタイルになっています。

(スライド 77) 教科センター方式の学校は、教室とホームベースと言われている、ロッカールームに近い生徒のスペースがあります。その間を生徒は授業ごとに移動していきます。

(スライド 78) 学校の中心には図書室があり、生徒達はいつも図書室を感じられるようになっている作り方になっています。

(スライド 79) 教科センター方式では、教科ごとに教室がまとまっていて、先生たちがそこにいて、授業を受けに生徒が移動するというタイプの学校になっているので、それぞれの



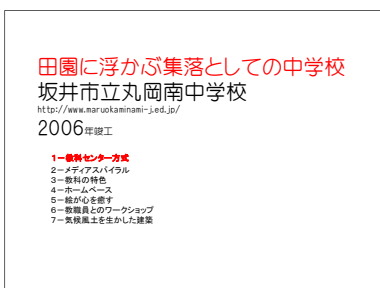
スライド 70



スライド 71



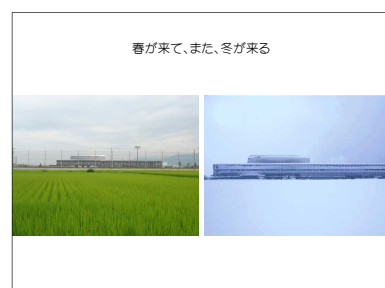
スライド 72



スライド 73



スライド 74



スライド 75



スライド 76



スライド 77



スライド 78

教科の教材がいつでも身近で見られるというような特色があります。(スライド 80-81) そうすると生徒たちが自発的に、自分から学習するというスタイルが生まれてきます。じっと教室で待っていて授業を受けるのではなく自分から受けに行くという授業です。そのためには移動が楽しくなくてはいけないということで、いろいろな移動の上の工夫をしています。

(スライド 82) 生徒自身が自分たちで好きな場所を見つけて、そこでどんどん学習をしていくということが実現しているのです。

(スライド 83) ここはランチルームです。生徒全員が入る大きなランチルームがあって、お昼を食べるときにちょっとした全校集会在が 5 分、10 分という形で行われています。(スライド 84) やはりここにも階段教室があって、「表現の舞台」と呼んでいるのですが、そこと自分たちのホームベースとの空間の差が、選べるようになっています。(スライド 85) 外部を通ったり、(スライド 86) 移動するときいろいろなものと出会ったり、異なる学年の教材に出会えます。(スライド 87) 例えば美術の先生は、美術教室でこのような物を作るのですが、このアート作品をいろいろな窓辺に飾って学校中をアートでいっぱいにしてきていま



スライド 79



スライド 80



スライド 81



スライド 82



スライド 83



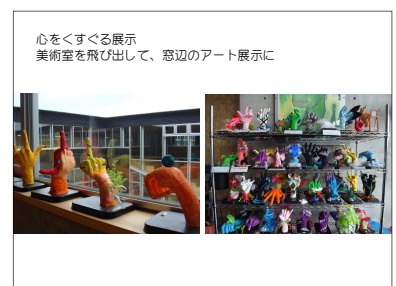
スライド 84



スライド 85



スライド 86



スライド 87

す。

(スライド 88) これは、しゅん工時にプレゼントしてもらった絵に、学校の先生方が買い足して、最初からここに絵が置かれました。ここは、何か掛けたくなるのです。なぜかというとな真っ白でとてもきれいな壁で、照明を工夫しています。階段の照明は、すごく難しいのですが、手すりに仕込んであって、床も白い仕上げです。すると、今みたいな冬やクラブ活動で中学生が遅く帰るときに階段室だけ真っ白い光ですごく明るいのです。ほかの照明を全部消していても、ここに行けば下に降りられるというサインになっていて、ここだけついています、ずっと。そうするとそこへ導かれてみんなが帰れるという、そういう計画にしています。(スライド 89) 日常的にきれいなものが気持ちいいということがこの学校の生徒たちは学んでいるので、ちょっとかわいい物とかきれいな置き方にも工夫してくれています。とても大切なことだと思っています。

(スライド 90) 併せて、冬場の雪で窓が埋まってしまうので、光がリバウンドしながら入ってきて明るくキープできるような工夫をしました。(スライド 91) ですから昼間スポーツするには、このように光がリバウンドするのでもぶしくありません。また、冬場に限らずいつでもそうですが、クラブ活動をやっているときが周囲に出て行くので、夜でも田んぼの中にきれいな光があるという工夫をしています。

(スライド 92) このプロセスでもやはり先生たちとのワークショップを行いました。先生たちにはどんな授業をしたいか、どんなスペースがあるとどんな授業を展開できるか、何度も何度も打合せをしました。各教科の先生たちと一緒に、1週間おきに何度もやりました。もうそうするとどんどんプランが変わるので、(スライド 93) 100 個ぐらい模型を作って最後はこんなふうな(スライド 94) ゴミになっています。ですが、それでも一つしか建築は建たないので、これを存分にやるというのが大切なのです。



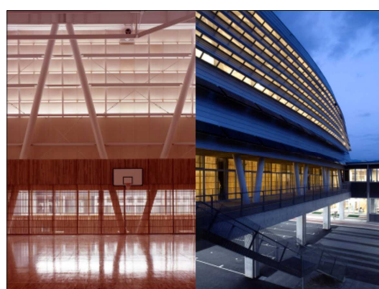
スライド 88



スライド 89



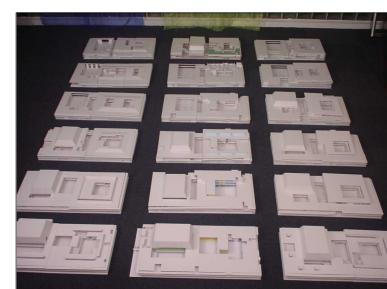
スライド 90



スライド 91



スライド 92



スライド 93

(スライド 95) 最後になります。今、日本の学校施設は国を挙げて、日本の木を使った木の学校文化をもう一度取り戻そうとしています。ですから多くの公共施設で木を使うという大きな姿勢を示していて、私はその木を使う法制度の改正にも関わっているので、自分で設計して苦しんで、何とか改正しなくては大変な事になると思って、今一生懸命頑張っているところです。2013年、去年の夏にフルオープンした山鹿市立山鹿小学校です。「学びの街道」「学びの原っぱ」というタイトルでこの学校を設計しました。(スライド 96) 大規模な木造で、この学校は 8,000 平米ほどあります。この 8,000 平米は日本の今の法律で造ることは難しいのです。ですからこれを少しずつ別棟にしながらかを造りました。あとは、歴史ある街に対してどういう建築を造るか、そしてコストを下げないといけない、という、三つの大きなテーマを作りました。

(スライド 97) この街には 100 年を超える八千代座という歌舞伎座が存在しています。子供たちはこういうところで、時代劇のような雰囲気のある保存地区で生活しています。つまり、子供たちは 100 年後を今見ているわけなので、私も山鹿小学校を 100 年後、八千代座のようにみんなに親しまれてほしいなということをお願いしました。

(スライド 98) もう一つは、この小学校のグラウンドで行われる千人灯籠というこの行事です。ものすごく美しい夜の踊りがあって、これを守らないといけないと思いました。(スライド 99) 学校の校舎を待機スペースとして使っておられたのですが、不便そうでもったいない。そこで、頼まれてもいないのですが、この行事が非常にスムーズにいくようにしようということで、コンセプトを立てました。

(スライド 100) 「学びの街道」と名付け、ここに 1,000 人の女性達が先ほどの踊り手さんが待機できるスペースを作りました。また、こちらは「学びの原っぱ」です。自由に学習や遊びを創造してもらおう原っぱを取り囲んで生徒たちがいます。先生はここに集中的にいます。



スライド 9 4



スライド 9 5

■山鹿小学校の建築目標

- 1 大規模木造を、地場の木と大工で実現
 - 8000㎡以上の木造建築の法的制約の解決
 - スパンの差を集成材に頼らない
 - 木造を活かした温熱環境のグレードアップ
- 2 歴史あるまちに新しい建築をつくる
 - 千人灯籠祭りの存在
 - 豊前街道の行幸
- 3 コストの低減と取組
 - プレハブ仮設を用いる等、工期に比べて着ながらの工事
 - 2校の児童にとっての居場所 (バス通学・部活待ち)

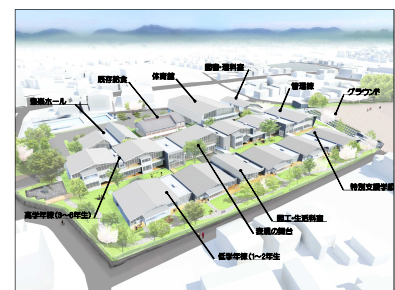
スライド 9 6



スライド 9 7



スライド 9 8



スライド 9 9

ここがオープンなスペースで、クラスルームは少しそこから離してあげて静かな環境を守っています。「学びの街道」の北には音楽室や体育館や図書館があって、将来的にはもっともっと地域活動に寄与してほしいと思います。学校が学校で閉じないで、もっと地域の核となって、先ほど地域の図書館というお話はありましたが、もっともっとオープンにしてほしいので、それが日曜日や休みの日でもフル回転できるように、セキュリティゾーンを分けています。

(スライド 101) コンセプトのときのスケッチです。そして、これが出来上がりました。教室と教室、異なる学年がみんな広場に対して面しているという、そういう計画になっています。私はこういうグリーンフィールドも非常に大切な学習の場と捉えて、外の教室という言い方をしています。(スライド 102) ですから、ティーチャーズ・コーナーというのがこういうところにちょっとずつあってお互いに見合えるようにしてあって、ここが自由に活動できる場所になっていて、教室は少し落ち着いた空間になっているけど、ここは存分に音も人の動きも活発にできるような教育ゾーンになっています。

(スライド 103) こちらは街道です。「学びの街道」というのは少し外向きの顔になって、子供たちが朝やって来たり、(スライド 104) 地域の活動が行われたりします。もう一つはこの学校建設のプロセスでは地域の大工さんたちと一緒に地域の材をそのまま使いたいということから、105 角の材という一般的な木材を使って大きなスパンを飛ばすことにしました。大変難しいのですけれども、知恵を出し合って工夫をして、普通の木でこの大きな学校を造っています。(スライド 105) これは建設しているときの様子です。これは私ですけど、このように現場の隅々まで管理をしています。

(スライド 106) そこに古い校舎があって、子供たちがここで授業をしながら、隣で工事が行われています。工事をしている側としては、大変ナーバスな関係になるので、私たちも



スライド100



スライド101



スライド102



スライド103



スライド104



スライド105

すごく気を使っていました。親たちも気にしています。ところがある日、学校の先生が「ちょっと工藤さん来てみませんか」と声を掛けてくださいました。教室に行くと、確か6年生の絵だったと思いますが、工事している人たちの現場の絵が生き生きと描かれていました。子供たちはダンプカーやショベルカーが動いているのがすごく楽しいとのことでした。みんな授業中は専念しているけど休み時間になったら、窓からこうやって工事を見ていたのですね。実は子供たちにとっても物づくりの貴重な体験だったようです。

(スライド 107) その子供たちに私もプレゼントしたいと思って、例えば、木を切った丸太の部分が見えるようなゾーンとか、ピクニックの気持ちになるようなグリーンの床を作ってあげたり、小さな、本の森みたいな場所を作ってあげたり、いろいろなことを工夫して返してあげています。

(スライド 108) やはり光が入るといことで明るく、でも風が流れ、それから静けさも担保できるということを私はとても重要に思っています。一般的に写真で見ていると音のことってなかなか伝わらないのですが、これは音の環境を最初からちゃんと計算して実験して、最後には実測もします。そうすると、非常に教員の声が通りやすくて、かつ静けさを持って授業できるようになります。(スライド 109) 雨音も防ぐような特別な工夫をいろいろして教育の環境というのを支えてあげたいと思っています。

(スライド 110) このような形で今、楽しく子供たちが使っていて、例えば図書室も椅子だけじゃなくてカーペットで寝転んで本を読んだり、楽しく話をしたりということができたり、物を置く道具のところも少しポイントで色を入れたりしています。(スライド 111)それから飾り棚がすごく重要だと思っていて、こういうものは、やっぱり先生たちは上手です。これは理科室の前ですけど、緑で美しい場所を作ったり生徒たちの道具をきれいにしたりしています。でもなかなかうまくいってないのはやはりこういう場所のセットをしてあげてな



スライド 106



スライド 107



スライド 108



スライド 109



スライド 110



スライド 111

いから、何でも物であふれているのですが、少し先回りをして準備しておくといろんな工夫を先生方がしてくださると思っています。(スライド 112) 家庭科室や低学年の庭もそうです。例えばこの小学校では鉄棒を1~2年生のときにたたき込み、全員が逆上がりができるようにするとおっしゃっていて、必ず低学年のクラスにプライベートな鉄棒をつけてほしいというリクエストがあり、これはそれを実現している様子です。それぞれの学校によって、やはりやっていきたいことが違うので、それを設計のときから十分に話をして受け取ります。

(スライド 113) エントランスを入ると、ここに白い玉があり、さっきと同じです。上下足履き替えて(スライド 114) ここが表現の舞台になっていて、これは出来上がった様子です。実はアメリカのリチャード・ストルツマンさんというクラリネットの世界ナンバーワンの演奏者が来て、ここでスクールコンサートをしました。320人に2回、合計640人の生徒に向けて行いました。これは終わってみんなうれしそうな顔をしています。演奏中はみんなシーンとなり、ものすごくキラキラした目で子供たちが見ていました。このような使い方がなされたりしています。

(スライド 115) このテーマは大きな屋根の下で、子供たちが家のような環境で過ごしてほしい、ということです。先ほど言ったすごく伝統的な町並みが保存されている地域に対して、こういう町並みの形をデザインのソースに入れました。(スライド 116) 去年の夏、しゅん工して完成した学校の様子です。日本ではとても有名なくまモンが、熊本ですのやって来ています。こういうイベントがあって、(スライド 117) 心に残る風景というのが100年先まで私は残っていく、それはやはり学校という施設は地域の文化と教育の要なので、その地域にある文化を絶対引き取っていかねばいけません。だから私は最近、この「幸せなローカリティー」という言い方をしているのですが、ローカリティーを持っている地域ほど強いなと思っていて、いかにそこにいる、住んでいるということが幸せかということ、学校



スライド 112



スライド 113



スライド 114



スライド 115



スライド 116



スライド 117

施設を通して引っ張り出してあげなければいけません。それは教育者の人の手でもあるけど、施設側がもっといろいろな工夫をしてあげることによって、それが何倍もすてきに見えるのではないかということを考えていて、こういう活動というか、自分の設計の中で取り入れてやっている次第です。

(スライド 118) これが最終の出来上がった夜の様子です。(スライド 119) 夕方になるとこんな風景が見えて、町並みに寄与していると思います。以上です。ありがとうございました。

司会：工藤教授，ありがとうございました。それでは引き続きパネルディスカッションに移らせていただきます。机を配置いたしますのでそのまましばらくお待ちください。



スライド118



スライド119

Ⅲ. パネルディスカッション & 質疑応答

司会：それでは準備が整いましたので、再開させていただきます。ここからは木下勇千葉大学教授にコーディネーターをお願いいたします。木下教授は、マルケッタ・キュッタ博士の共同研究者であり、日本のこども環境学会理事、日本学術会議子どもの成育環境分科会幹事をお務めになるなど、子供環境学の権威でもあります。木下教授、どうぞよろしくお願いいたします。

木下：西さん、ありがとうございます。どうも、皆さんこんにちは。これから40分強余りディスカッションの時間を取りたいと思います。時間も限られている中で、できれば会場の皆さんからも質問を受け付けたいと思うのですが、先にお三方の話を聞きながら、少し質問をこちらから投げかけたいと思います。

まず一番目にレイノさん。海外の方はファーストネームで呼ぶのが普通になってきているので、ここからはファーストネームで失礼させていただいて、レイノさんに。お話にもありましたが、総合学校、Comprehensive Schoolにフィンランドが方針を変えた。20年前ぐらいから変えたとお話がありましたが、なぜそのように変えたのかというのをもう1度お聞きしたいと思います。よろしいでしょうか？

タパニネン：そうですね。小学校から中学校まで、すなわち6歳から15歳までが、どうして総合学校になったのか、というお話をさせていただきます。

まずその理由ですけれども、やはり学校における、例えば小学校ですとか義務的な総合学校における一貫性を強化したいということです。学校によって同じ教師を活用したい。同じ機材を活用したい。そうすることでまた学校によりよい機材を導入したい、また学校としても、例えば各段階において特別な授業ができるということがあったのだと思います。すなわち効率も良い。そしてスペースも学校の設備も施設もより活用できるということなのですね。その結果、学業の成果も上がっています。

木下：ありがとうございます。もう少しお聞きします。効率の面からのお話がありましたが、フィンランドでは昔の教育はかなり中央集権と申しますが、そういう中であったのが、だんだん地方分権とともに学校の先生の自主性に任せるようになった、マルケッタさんの講演ではインディペンデントとおっしゃっていましたが、そういうものが強くなったこともその背景にはあるのでしょうか。

タパニネン：そうですね。それもあると思います。確かに、フィンランドでは学校においても分権化を進めました。すなわち国が責任や権限を、よりその地方のレベルに落としていきました。そして、その市町村に与えていきました。それと同時にある一つの現象が見られるようになりました。すなわち、市町村などにおいて、遠隔地の学校はどんどん統廃合を進められて閉鎖されている。ですから逆に市町村レベルにおける教育行政では、どんどん一元化されつつあり、学校はコミュニティーセンターとして集約され、村にあった小さな学校は廃校になっています。市街地や地域の中心部に大きな学校を建てるようになりました。ですから他方で、国レベルでは確かに分権化が起きている。ところがローカルレベルでは逆に集約化が進んでいるのです。

木下：はい。その辺りは日本も共通する課題ではないかと思います。さて、そこで日本での小中一貫教育校への転換という背景の理由に、工藤さんからはいくつか並べられた中に、「中1ギャップ」という言葉がありました。この辺りはフィンランドにあるのかというのはマルケッタさんに聞いてみたいと思います。マルケッタさんどうでしょう。中1ギャップって分かりますでしょうか。小学校から中学校に子供たちが移るときに学校も違えば環境も違い、先生と生徒の関係も違って、そこで春に学校に行き始めてからいろいろなストレスを感じてしまう。中には先ほどマルケッタさんも御存じの、引きこもりとか。そのようなことも起こってしまっています。そういうのは日本では小中一貫教育への流れの理由の一つにはなっているかと思いますが、そういうのはフィンランドにあるのでしょうか？

キュッタ：いえ、我が国においてはそれほど小学校と中学校との間に大きなギャップがあるとは思いません。全ての学校が統合されて、一貫教育となっているわけではありません。フィンランドでもまだ別になっている学校もあります。私の息子が通っている学校もそうなのですが、小学校を卒業して、そして近くにある近所の中学校に入りました。しかしながら、小学校から中学校への移行において大きなギャップがあるという議論は一般にはないと思います。

中学校から高校に移るときにより大きなギャップがあると思います。フィンランドの高校では最近、新たに課程ベースのシステムに移ったからです。つまり、子供たちがかなり自立を求められるわけなのです。自分たちのカリキュラム、課程を自分で作って構築しなければいけないようになるわけです。ほとんど大学課程と同じような能力を求められるわけです。勉学は自立して行いなさいと求められます。

また、教室という単位もほぼ取り払われていたりします。ですから、中高の間の方が、小中の間よりもギャップが大きいと思います。

木下：国が違うと異なりますね。中1ギャップより高1ギャップ。高1ギャップという名称があるかどうかは分かりませんが。

もう少しマルケッタさんにお聞きしたいと思います。工藤さんのプレゼンテーションで小中一貫とした場合でも、子供たちは7歳から15歳まで。ちょっと前までは幼稚園、保育園だったとても小さい子供ら、小1、2年生。そして上はもう体格は大人と変わらないぐらいの15歳まで。それが同じ場所にいるときに分けたりしますけれど、教育の仕組みとして、子供たちを大きく分ける中で4・3・2という分け方があります。それは主に7歳から10歳ぐらいまで、それから11歳から13歳まで、それと高校生に近くなってくる14、15歳という分け方。4・3・2と子供たちを区分して見ているのですが、マルケッタさんは環境心理学で子供たちの行動が、例えば、発達心理などの面からどの分け方がいいのか、フィンランドではそういうような分け方ってあるのでしょうか。また社会一般にも7歳から15歳までの子供の成長の捉え方というのは、どのように区分したらいいのかなど、何か御意見はありますでしょうか。

キュッタ：そうですね、実はこの点について私、本当に専門家であるかちょっと自信はないのですが、総合学校ということ考えた場合、最終的には学校の設計、建築にかかってくると思います。私は、先ほどの工藤先生のプレゼンテーションを本当に楽しませていた

できました。素晴らしいことに取り組んでおられると思いました。私自身目の当たりにしたことのない、様々な要素が盛り込まれていました。フィンランドでもどの地域でも見たことがない要素がちりばめられておりました。本当にセンシティブに、本当に慎重に、そして神経を使って子供たちの要素、例えば異なる発展段階を尊重するとか、そういったことを本当に丁寧に考えておられるのだなと思いました。

例えば、異なる年の子供たちのために、別のスペースを確保しながら共用のスペースもちゃんと確保されている。また、例えば子供のプライバシーの確保や騒音の制御なども、対応しようと思うと大変だと思うのですが、やっていらっしゃる。毎日、ずっとうるさい場所にいることはストレスが多く大変です。実は私の子供が小学校やデイケアに行っていたとき、夜、ほとんどもう大声で叫ぶように私にしゃべるのです。本当に大声でしゃべるのです。どうしてなのかなと思ったのですが、多分彼らはずっと学校だとかデイケアでも、大声を上げないといけなかったからだと思うのです。ですから、そういった音に対するセンシビリティも大変重要だと思いました。

もう一つ素晴らしいなと思ったのは、工藤先生の学校は本当に建築面でも天才的だと思いましたが、それと同時にそれでもデザインの段階、そして企画のプロセスで、子供たちの参加を促していらっしゃる。例えば、子供たちの作品の展示にスペースを与えたということも素晴らしいと思いました。本当に素晴らしい取組だと思いました。

タパニネン：続けてもいいですか。フィンランドでは、小中の組合せというのはそれほど大きな問題にはなっておりません。大きな学校はそんなにないからです。総合学校の全学年合わせた生徒数は700人、800人程度が最大限になっているからです。問題は校舎のスケールです。校舎の規模は生徒の規模に合わせなければいけない。工藤先生とマルケッタさんが言っていたように、ゾーニングが非常に重要だと思います。共通の場所、全ての生徒及びユーザーが集まることができる会合の場所と、それから年齢、学年ごとのホームベースがあります。そして、この年齢、学年ごとのユニットはそれぞれに合わせて小さく作ることが非常に重要です。

木下：そうですね。小さい子供に合ったスケールとゾーニングの設計上のデザインで解決していくべきものと、それからランチルームのようなコモンというか、共通のコミュニケーションを活性化する場所とがある。せっかく小さな子供から大人に近い大きな子供までいるので、そういう組合せをうまく、コミュニケーション、伝達場に生かしていくデザインが重要だということですね。そういう面で工藤さんの建物は称賛を浴びたわけですが、先ほどマルケッタさんのソフトGIS調査をやったらいいかもしれませんね。実際に子供らがどうふるまうに動いて、どういうところは好きにやっているか、自分の場所とかが分かるかもしれません。そんなことを今後、もしできたらというのは、夢として膨らみます。マルケッタさん、どうぞ。

キュッタ：本当に夢ですね。本当にそうなればいいと思います。でも、工藤先生は、多くのフォローアップをするということ、既に関心を持たれています。どの活動にどんな場所が使われているか、設計された場所をどう使われているか関心をお持ちです。どんな建築家も、多くのアフォーダンスを検討して空間のデザインをされていると思います。こういったとこ

ろはこの活動に使われるだろうと考えていると思うのです。だけど本当にそれが実現しているかどうか分からないですよ、フォローアップをちゃんとしなければ。建築後の観察、又はフォローアップをすることが必要ですから、やはり工藤先生がその側面に注意していただいていることについて、とても評価します。

木下：日本、フィンランドの共同研究に発展できたらいいと思います。先ほどの小さな子供から大きな子供の話ですが、7歳から15歳までの子供について、工藤さん御自身、そのスケールのことや、デザイン上で工夫したこと、それから先ほどのアンケートだと4・3・2ですけど、どのように9歳の違いがある子供たちを、ゾーニングというか、分けたりするに当たって、小中一貫校のデザイン、設計で工夫された点や苦労された点も含めて少しお話しいただければと思います。

工藤：私自身がそんなたくさんの小中一貫校やっているわけではないのですが、たださっきちょっと出ていた、リーダーというのはすごく大切だと思います。9年間いるけど、例えば4とか3とかどこかでリーダーの気持ちになることが大事だと思います。上もいるけど、自分がリーダーになることによって、小さな子供たちをちゃんと見てあげる。それが少し繰り返されていく、そのリーダーになり得るポイントがどこにあるかな、ということを経験するときには割と考えています。例えばそれが小学校6年でリーダーになって、上の学年に上がると、また下に入るけどまた大きくなってリーダーになるという過程。そのつなぎみたいなことはとても大切にしたいなと思っています。

それが建築として具体的に出るわけではないです。ただ、それと逆のこともあります。先ほど白い玉、白玉と学校では呼んでいますが、あれは小学生がいると決して中学生は入って来ないのです。子供みたいって思われる。だけど、小学生がいなくて全く同じことを中学生がやっています。つまり、小学生でも中学生でもやっぱり子供なのです、マインドは。

博多小学校には幼稚園と小学校があります。幼稚園にも床に埋め込んださいころ椅子を作りました。小学校にもさいころ椅子があります。そこでは、子供たちは全く同じことをするので。幼稚園児も小学生も。つまり、少し体も大きくなっているけど、遊びとかほっとするとか、そういうのは多分変わらないのだと思います。まだ大学にこのようなものを置いたことがないのですが、大学生も多分同じことをすると思います。

日本では「それは教育ですか？」と言われると、定義で言うとそうじゃないかもしれませんが。だけど子供の発達という意味では、すごく大切なんじゃないかと私は思っているので、多分そのつなぎが教室の外にあると私は思っています。

教室の外。クラスとか、学年が関係ないところに豊かな空間をどれだけ作れるかがこういうたくさんの学年の生徒が一緒にいるときに、やっぱり大切になるのではないかなと思っています。

木下：ありがとうございます。その辺り今度はレイノさんにお聞きしたいと思います。フィンランドでは、年上の子供と小さい子供のコミュニケーションはどんな場で行われているのかというのを、もし御自身見てらっしゃる中でありましたら教えていただけたらと思います。日本と同じような感じでしょうか。工藤さんから見せていただいたような、ランチルームのような、そういう場所でしょうか。

タパニネン：そうですね。まずその学校の校庭で会いますよね。学校の校庭は同じですから。小さな子供だろうと大きい子供だろうと、同じ校庭なのでグラウンドは同じです。また、共用スペースも多々あります。集会スペースや食堂もそうですし、そこで一緒に食べたり、お互いに話し合ったりします。あと、同じ特別教室も活用していますから、機材も同じ物を使っています。ですから、正にそういったところで繰り返し接触したりお互いに会話したりするのだと思います。

もう一つ、さっき椅子の話がありました。子供たちの体のサイズが違って、家具をどうするのかということがありました。テーブルや椅子は調整可能なものを活用しています。ところが、実際の生活の中では、子供たちは大人と全く同じものを使っています。例えば、家だろうと学校だろうと同じものを活用しています。ですから、別に子供だけのために特別な家具が必要なのではないのですね。同じものを家でも使っているわけですから。家では別に調整可能なものを活用していませんので。

工藤：もちろん、長い時間座っている椅子はコンフォータブルに調整が必要かもしれませんが、おうちで食事するテーブルなどは、みんな足もついてなくても子供は使っているわけです。例えば電車に乗って座るとかも同じです。だから日本は、子供たちにフィットさせようと少しナーバスになり過ぎていると思います。そうすると、共有できないという答えを出してしまいます。そんなことないと思うので、その辺りをもう少しラフに考えれば、学校の施設をもっと共有できると思います。

先ほど、レイノさんのプレゼンテーションを見せてもらって800人のスクールで、1万平米だとおっしゃっていました。多分日本でこれやろうと思うと、800人だと、小中連携だと重ねられないなどいろいろ問題が出てきて、1万5,000とか、1万4,000平米ぐらいになるのかなと聞いていて思いました。やはり、かなりいろいろなものを重ねてらっしゃいます。その分を多分もっと機材などいろいろなことに費やすことができているのかなと思います。少しその辺りも日本はいろいろ学んで、もう少し重ね合わせる努力をすることも必要なのかなと、拝見させていただいて思いました。

木下：本当そうですね。重ね合わせる努力をする。またレイノさん。ありますでしょうか。

タパニネン：一つ、コメントしたいと思います。意図的にフィンランドでは、平日においてはできる限りのものを共用してもらいたいと考えています。共通の認識として、全ての教室及びスペースにおいて、20時間は少なくとも授業時間を確保するようにしています。平日において、全てを十分活用することができるように、シェアリングをするわけで部屋も共用します。低学年も高学年も同じ場所を使うようにするわけです。

では、どのように時間割を作るかということですが、これは校長先生と教頭先生が頭を悩ませるわけですが、でもこういうことやらなければいけないわけです。効果的に有効的に、フルにスペースを活用するために必要なことです。

木下：それは重要なマネジメントですね。正に空間の有効活用ですね。これこそが小中一貫校においてマネジメントしがいのある課題かと思っています。空間を共有する、シェアする中でいろいろなコミュニケーションもあったり、理解も深まったりするということがかと思っています。

工藤さんのプロジェクトだからかもしれませんが、割と地域の盛り上がり、最後の幸せなローカリティーとおっしゃっていましたが、そういう体育館やいろいろなスペースを、運動場も含めて、地域のイベントのとき使えるようにされています。それもシェアですね。地域とシェアしています。学校が地域に開かれています。これは、コミュニティースクールといって、今日の小中一貫教育校というテーマとはまた別なテーマになってしまっていますが、レイノさんやマルケッタさんにフィンランドの学校についてお聞きしたいと思います。地域の人たちの利用による学校施設のシェア、そのように使われたりするのでしょうか。また、地域の人たちが学校に来て子供たちに教えるということはフィンランドでもありますか。

日本もまだいろいろ地域と関わったりすることはあんまりなく、日本でもまだまだ課題なのですね、学校と地域の関係というものは。フィンランドではどうなのでしょう。工藤さんの学校は特別だということで御理解いただいた上で、一般的な質問で申し訳ないのですが、お話しできますでしょうか。

キュッタ：ではなんらかの形でコメントをしてみましょう。私自身は例えば、親も祖母も教師というバックグラウンドであるので、個人的な経験があります。子供時代、ずっと学校の校舎の中で生活してきました。そういったような個人的なバックグラウンドから、校舎に対する思い出もあります。

申し上げますと、父の姿勢なのですけれども、実は学校は自分のもの、という思いでした。要するに彼に許可を求めなければいけませんよと。例えば、学校の設備を夜間に使いたいか、そういうときは自分に許可を求めよ、という発想だったのです。もちろんそれはそれでいいと思うのです。それだけ責任感を持って父は、その学校のスペースの管理に当たっていたわけで、確かにそれは彼の責任でした。父は校長だったのですから当然なのかもしれません。

でも最近になりますと、それについてはもっと効果的な形で学校の校舎を貸出しするべきではないかという議論が高まっているのです。特に地域の住民によって、例えば夜間だとかもっと活用できたらどうかということです。もっと形式にとらわれない活用にも開放するべきではないかという議論が進んでいます。正確な情報を持ち合わせてはいないので、この数年間で増えたかどうかというのは分かりませんが、ただフィンランドではそういった方向に対する需要が高まっています。

要するに、地域活動のための建物を学校の校舎と別々に設けて両方を維持するという余裕がありません。もちろんコストもかかるからという発想がそこにはあります。レイノさんならばもっと正確なことが分かるかもしれません。レイノさん教えてください。

タパニネン：そうですね。学校はその市町村の傘下に置かれています。したがって、市町村が投資をします。校舎というものももちろんコストが高いわけです。したがって、市町村としても是非校舎を課外の時間においても効果的に活用してほしいと願っているのです。場合によっては親御さんのミーティングができるように開放したり、例えばイベントを主催したり、その教育セミナーを行うこともあります。こういったものは毎週必ず夜ですとか、夜間に行われています。

また、語学教室も教えられていたり、真夜中までスポーツをやったり、そういったこともあります。あと特別教室でも、例えば絵画や工芸なども行われています。したがって、課外

時間における活用は今高まっています。

またトレンドとしては、夏の間もやはり学校をもっと活用するべきだという動きもあります。夏季、夏の間の活用度も高まっております。学校が、場合によってはホテルのように変身をしているケースもあるそうです。例えばソファやベッドを教室に入れて、夏はホテルとして機能する、そういった例もあるようです。要するに、校舎の維持にお金がかかります。ですから、可能な限り効果的に活用するべきだと思います。

木下：なるほど。夏は学校をホテルに。それはいいですね。日本でもできますでしょうか、将来的に。廃校を宿泊施設にするという事例はありますけれど、そういう面でフィンランドは地域開放というのはかなり進んでいるようであります。それから、もう1点。これはレイノさんにお聞きします。マルケッタさんは工藤さんの設計過程に地域住民が参加する、また子供らが参加することに感心されておりました。

この文教施設研究センターで最初にこういう開かれたシンポジウムをやった第1回で、ドイツのペーター・ヒューブナーさんという方をお招きしました。彼は、子供たちと学校を作ったという、正にそういう参加型設計のベテランの人を呼んでの話でありました。フィンランドでは、そういう学校建設に計画設計の過程で、地域の人や子供らの参加、そして施工の段階でもそういった地域や子供たちの参加というのはあるのでしょうか？

タパニネン：全てにあるというわけではないのですが、あるときもあります。ケース・バイ・ケースです。生徒たちにどんな意見があるのか、将来の学校がどうなってほしいかということを書いてもらったり聞いたりします。例えば、改修するとき、生徒は既に今までの建物を使っていて分かっているわけですから、生徒たちにデザインのプロセスに入ってもらいます。建築家にとっても非常に価値あるアイデアを得ることができます。

また、保護者の方にも入ってもらいます。地域にはPTAがありますので、そこから教育委員会に代表を送り込むことができますので、そこを通じて参加をすることができます。デザインのプロセスの参画し、彼らの意見を反映させることもできます。非常にアクティブなプロセスが実現しています。

できるだけ全てのユーザーを参画させたいと考えています。デザインの中に意見を取り込んでいきたいと思っています。ユーザーは何が欲しいのかということを考えて、それを聞きたいと思います。

キュッタ：私の方からは例を申し上げたいと思います。ヘルシンキ市においては、かなり前から興味深いプロジェクトが行われています。割合に基づいたプロジェクトがあるのですけれども、毎年投資されている学校関連又は教育関連の建築に使われる費用の1%から2%を生徒たちに還元して、学校の周辺環境をどう改善したいかということを知りたいです。少額のお金を必ずしも学校そのものの環境改善に充てるのではなくて、その近所にある地域コミュニティの中の何かに投資してもらおうというプロジェクトがあります。

例えば、私の娘がそのプロジェクトに参加しました。このプロジェクトは、各学校に順番に回っていきます。どの学校も必ずそのチャンスが回ってくるわけです。娘がそのプロジェクトに参加したことがありました。今でも言うております。毎回、学校の近くの多用途のスポーツエリアを通りかかるときには、「私があれば決めたのよ、私が作ったのよ」というふう

に、非常に誇り高く言ってくれます。娘はいつも思い出しているようです。本当にすばらしいと思います。

お金の使い方として、子供たちのプランを実現するために使うわけです。そのお金が保障されているわけです。単なるスローガンではなくて、現実のものに実現されるというプロジェクトですから、これは極めて重要なことだと思います。

木下：ありがとうございます。小中一貫教育校、また総合学校と外れたようなテーマのように皆さん感じるかもしれませんが、私の方からあえてこの点について聞いたのは、7歳から15歳という人間形成の重要な時期に、環境と関わったり、自分らで環境を作っていくという、これは、工藤さんのおっしゃられたユネスコの持続可能性ということも、環境教育でも非常に重要なことでもあります。そういう責任ある市民を作っていくという、OECDではシチズンシップの教育としてこの辺りは非常に強化されて、学校でも重要なテーマになっています。

私もユニセフの「子供にやさしいまち」という1996年から始まったプログラムに関わっていますけれど、そこでも重要なのは子供の参画です。そういうことを小中一貫校の中で小さい子から年上の子までやるということは、年上の子がやるのを小さい子が見ていながら学校の中で過ごすということです。そして学校と地域も、開かれて一緒にやっていくということは、地球環境問題も含めて、いろいろな問題を含めて地域を自ら作っていくことです。ローカルガバナンスというものを強化していくことです。日本でも東日本大震災で被災した後の地域の絆というのがテーマになりましたが、それはお互い協力し合って生きていくという社会関係資本を作っていく上で、重要なテーマであります。その重要な課題に、小中一貫校でできる可能性というのはもっとそういう面もあるのではないかなと思いましたので、議論をそちらの方へ振り向けさせていただきました。

あと少し時間がありますので、会場の皆さんから御質問御意見でも結構ですが、ありませんでしょうか。ある方は挙手をお願いします。所属とお名前も言っていただけると、記録のためをお願いします。

木村：神戸大学の1回生の木村と申します。まだ1回生で教育学についての知識、余りないのですけれども、今、子供たちの読書離れが起きているという話を聞いて、講演の中で図書館とかメディアスペースの活用についてのお話がありましたが、特に工藤先生から「小中一緒だったら、いろんな文献があるからその子に応じた本を読むことができる」というお話だったり、レイノさんから「今はインターネットの時代で、子供たちはそっちのゲームとかインターネットに行っちゃうから」というお話があったのですけれども、子供たちからどのように、自分たちから読みたいという気持ちを起こさせるスペースづくりを実践されているのか、もう少し詳しく教えていただけるとありがたいです。

あと、個人的な話なのですが3月にフィンランドの小学校に2週間、教育実習に行くので、楽しみにしています。

工藤：すばらしい。私からいきましょうか。

木下：いいですか？

工藤：はい。先ほども少しお話ししたように、具体的に本が小中学校で、例えば日本は漢字というのを使うので、小学生はひらがながたくさんあって、中学生は漢字がたくさん、みたいになっていくと、そこでまたギャップがあります。だからそのリレーションが非常にうまくいっているというのは、図書司書の人に私は聞いて、なるほど、と思ったのですね。

もう一つやっていることは、最初に私が初めて小学校の設計をしたとき、もうずいぶん前ですけど、図書室に入るところには手洗いをつけなさいって言われたのです。それは、本が大切だから、手を洗ってから本を読むという歴史があったということです。そしたら図書司書の人は、「今どきそんなことをやらせたら、子供は本を読まないわよ」っておっしゃいました。でもそういう歴史があったのよ、と教えていただいたことがありました。それでいろいろなことを図書司書の方とお話をしました。さっき御紹介しましたが、図書室にカーペットのフリースペースがあります。つまり、昔は、お行儀よくちゃんと本はこうやって読まなきゃいけないという教育をずっと日本でやってきていました。ところが、おうちに帰ってみんななどんな格好して本読んでいるの？という、みんなソファで転がったり、床に転がったりして本を読んでいます。そのリラックスした空気で本を子供たちはおうちで漫画なり何なり読んでいるのに、学校に来たら「席に座って本を読まなきゃいけない」って言われたらみんな読まないでしょという話でした。じゃあ図書館をどれだけリラックスできて、どれだけほかの教室より気持ちいいか、ということ、すごく図書館のときは考えています。だから、サインとかファーニチャーとか、すごくこだわったものを作っています。で、図書館だけは特別ってことをいつもやるのです。

これは教育委員会の方にも喜ばれています。要は全部の教室に特別な家具を作るとお金がかかるんですけど、図書室にはお金をかけましようっていうのはある程度オケーということがあります。お金をかけるなら私は図書室にと思っています。すごく快適な図書室空間を作ってあげると、子供たちも自然にやってきて自然に本を読むということが起きます。近くにもコンピューターがあって、両方学ぶツールとして使う、そういうやり方をしています。

木下：木村さん、よろしいでしょうか。

タパニネン：私もよろしいですか。フィンランドは非常に書物が大好きな国民性です。聞いたところ、フィンランドは実世界の中で最も新聞を買う、消費する国民だということなのです。やはり、本にしても読む傾向が非常に強いのです。それが子供たちにも伝わっていると思います。したがって、読むということは大変重要です。それと同時に、我々は余り多弁ではありませんので、本及び読書に関心が高い国民性なのだと思います。

また、学校の図書館ですけれども、言うなれば食堂と同様で最も重要な場所となります。どの学校でもそうです。どの学校でも図書館はあります。その図書館はとにかく行きやすい、歓迎してくれる、誰にでもオープンな場所でなければなりません。本や本棚だけではなく、本当に家のように落ち着くスペースが必要だと思うのです。例えばあるコーナーで、子供たちが自分の好きなやり方で読めるようなスペースを確保してあげるといったものです。工藤先生がおっしゃったとおりで、本当に居心地がいい、快適な楽しい場所であるべきだと私も思います。行きたくなるような場所であるべきです。そういった場所を作りたいと思っています。フィンランドではそうしています。

木下：そうですね。フィンランドの行きたくなる居心地のいい、隠れ家のような場所というのにコテージがあります。フィンランドの人は大概コテージを持っていて、自然豊かなところで、そして夏休みの5週間ぐらいとか、毎週末行くなどしていますね。そして私はマルケッタさんのコテージに、車で3時間か4時間ぐらいでしょうか、連れて行っていただいたことがあります。そのときに、コテージにはテレビもない、電話もないのだったでしょうか。だから多分、フィンランドの人たちはコテージで本を読むしかないのです。あとは森を散策してキノコを採るとかです。だから本、先ほど読解力とかいうのも高いのかなとも思ったのですが、その本が今は子供らをゲームに取られているのかもしれないかもしれません。コテージにゲーム持って行っていいかどうか分からないですが、その辺りは今後の課題かもしれません。

それでは、あと1人ぐらい、皆さん会場から御質問ありましたら伺いたいと思います。はい、どうぞ。

三浦：船井総合研究所の三浦と申します。有意義なお話ありがとうございます。先ほどの工藤先生のお話の中で、木造の学校というお話がありまして、私も非常に共感するのですが、フィンランド、ヨーロッパでは新しい集成材で造る木造建築が非常に増えているとお聞きします。大きな建造物が増えているということをお聞きしておるのですが、学校建築にもそういった新しい大型の木造建築がフィンランドでも進んでいるのでしょうか。その辺りを教えていただけますでしょうか。

タパニネン：はい。フィンランドにはたくさん森林があります。木材も豊富です。ただ消防規制がありますので、木材を使った建築や木造の学校というのはかなり制限されています。しかし、この規制が少し改善されまして、ほかのシステムを使って防火対策をすることができるようになったので、高層アパートでも木造で造ることはできるようになりました。また、だんだん例が増えてきております。学校の校舎についても木材を使うことが増えてきました。常に増えていると思います。恐らく将来にも木造建築は増えていくと思います。

木下：よろしいでしょうか。さてもう時間も残り少なくなったところで、せっかくですからパネリストの皆さんに一言ずつ、特に今後の小中一貫教育校、総合学校の課題というようなことで、お話しいただければと思います。では、レイノさんからよろしいでしょうか。レイノさんからマルケッタさん、工藤さんと。

タパニネン：最大の課題ということで、ちょっと考えてみます。フィンランドは、今や例えば地方部での学校の閉鎖という局面にあります。そして、逆に市町村の中心部に学校がどんどん集約されています。そういったトレンドとなっております。したがって多機能で、効果的で、そして正に未来の学校というものを構築しなければなりません。ただ、これはまだまだ議論のさなかにあるわけです。まだ明確な答えはありません。でもそれを目指したいということだと思えます。

木下：ありがとうございます。では、マルケッタさん。

キュッタ：個人的には、どのように生徒たちに、環境的社会的な持続可能性の将来の課題に

対して、どう対応するかということを経験していくのか、これが近い将来においての最も大きな課題だと思います。我々全員にとっての、くさび石となる課題だと思います。巨大な問題でありますので、いろいろ何千もの答えがあると思います。一部に対する一つの答えにしかなりませんが、私は、より包括的な学校制度、3世代を対象としたような、高齢者と若い人たちの知恵を組み合わせるような学校制度を導入したらいいと思います。日本とフィンランドは両国とも非常に定年退職を迎えた方々が増えてきておりますから、その一部の人たちをもちろん任意で自由なペースで活発な方々、アクティブシニアと呼べる人たちを呼んで、何らかの形で学校の教育制度の中に組み入れていけたらいいと思います。そうすることで彼らが、今後の将来の課題に立ち向かっていくに当たって若い世代に教育していけるのではないかと思います。

工藤：施設面では、小中学校が1か所に集まってくるというのは、地域にとっては今まであった学校と距離を持ってしまいうエリアがいっぱいできてしまいます。自分たちの近くにあった学校がなくなってしまうわけです。そのことをやはり認識した上で、その地域の人たちと、いかに学校がどうやって手を結ぶか、学校に参加する機会を、今のお話にもあったように参加する機会を増やせるような施設計画を残しておく必要があると思います。

先ほどの語り部の部屋というのは正にそういうところで、学校の先生たちが展示をするのではなくて、地域の人たちがそこをマネジメントして、ギャラリーのように使っているという場所です。そういうもの、先生方の責任の範囲外で割と自由にできるような場所を施設側の設計者は考えていかなければいけないと思います。また同じ学校で9年間育つのは、子供も育つけれども、親も育っているのですね。ペアレントも。親も人間としてその9年の間に育っていくから、親たちも一緒に何かこう作り上げていくというプログラムが、上手に学校施設を使ってできるというのではないかなと思います。

やはり小学校1年生の親はビギナーです、親として。でも中学校を出る頃には、ある程度ベテランのお母さん、お父さんになっているわけです。親の発達というのも見逃せないことで、これからそういうのも合わせていくということが大切なのではないかと考えています。

木下：ありがとうございました。私の方で最後にまとめにあれこれ話す必要もないくらい、お三方が言ってくださいました。一言で表すと、シェアという言葉かと思います。共有するとか、重ねるとか、シェアするということが、空間の効率的活用でも、先ほどのようにレイノさんの言うておられたように、空間を20時間は使わなければいけないことや、小さい子供たちも、年上の子らもという工夫もあるでしょうし、それ以外に今のお話のように、親も関わってくるということがあります。親の経験も子供たちに重なっていきます。それからマルケッタさんがおっしゃっていた、3世代、定年退職したおじいさん、おばあさんの世代もまたそういう経験を子供たちにシェアするということです。

そういう空間と人々のコミュニケーションをシェアする、というのが小中一貫校でのチャレンジかなと思います。それを建築家の人たちが、どう子供たちや教師や保護者とかと、話し合いながらそういう空間を、工藤さんの言葉を借りて言うなら「幸せなローカリティー」に落とし込んでいくかということになると思います。また、そこから出来上がったことも、利用の仕方次第で統合されたら、いろんな地域の範囲の中で、シェアするセンターとして学校が成り立っていく、そういうことが、今後のやはり課題かなということが浮かび上がったか

と思います。

これで私の方の簡単な取りまとめで本日の講演会、終了させていただきます。どうもありがとうございました。また、パネリストのレイノさん、マルケッタさん、工藤さん、ありがとうございます。

最後に、主催の国立教育政策研究所文教施設研究センター長の齋藤福栄センター長から、閉会の御挨拶を申し上げます。

IV. 閉会の挨拶

閉会の挨拶

齋藤 福栄 国立教育政策研究所 文教施設研究センター長

齋藤：今日は、文教施設研究講演会に最後まで長時間にわたりご参加いただきまして、誠にありがとうございました。レイノ・タパニネン様からは、フィンランドの総合学校を中心にいたしまして、学校施設整備の動向について建築的な側面、それから制度的な側面も含めまして御紹介いただきました。フィンランドにおける質の高い学校施設づくり、あるいは未来の学校の姿、こういったものはこれからの我が国の計画においても、非常に示唆に富む内容だったのではないかと思います。

また、マルケッタ・キュッタ先生からは、環境心理学の側面から子供たちの行動と環境の関係性に関する研究成果について、お話をいただきました。子供たちの独立した行動のしやすさ、こういう視点からの日本とフィンランドの子供たちの比較というような、非常に我々にとって新鮮な視点を与えていただけのお話だったのではないかなと考えております。

また、工藤先生からは、数々の学校施設を計画されたお立場から芝園小中学校をはじめとして最新の木造校舎のプロジェクトに至るまで、これからの学校施設計画に多くの示唆を与える計画事例の御紹介をいただきました。工藤先生の、子供たちの様々な活動を促す環境を作り出すという設計思想は、フィンランドのお二人のお話の中にも随所に見られる話でありまして、相通じる点があったのではないかと考えております。

また今、ご熱心にご議論いただきましたが、木下勇先生のコーディネートによりまして、今回はパネルディスカッションの場を設けさせていただきました。十分な時間ではなかったかもしれませんが、ご講演の内容、熱心なご議論を通じまして、より一層深く理解することができたのではないかと考えております。

工藤先生のご講演の資料の中でもご紹介がございましたが、国立教育政策研究所では平成19年、平成20年にプロジェクト研究の一環といたしまして、小中一貫教育校の学校施設の在り方に関する調査研究を実施しております。本日の資料といたしまして、この報告書を配布させていただいております。本日のご講演、それからご議論、それと合わせまして今後の小中一貫教育校の計画づくりに参考にさせていただければ、大変幸いです。

文教施設研究センターでは、今後ともフィンランドセンターをはじめといたしまして、海外の研究ネットワークとも連携を図りながら、引き続き学校施設づくりに資する情報の提供をしてみたいと考えておりますので、今後ともどうぞよろしく願いいたします。本日は、誠にありがとうございました。(拍手)

参考データ

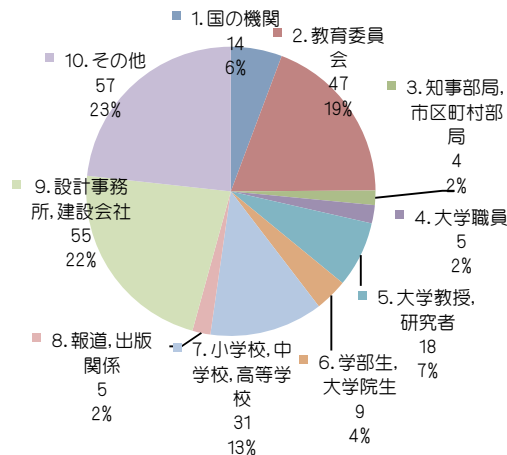
参加者

事前登録者数:287 当日参加者数:245 当日参加率:85%

当日参加者 所属属性

	人数	割合
1. 国の機関	14	6%
2. 教育委員会	47	19%
3. 知事部局, 市区町村部局	4	2%
4. 大学職員	5	2%
5. 大学教授, 研究者	18	7%
6. 学部生, 大学院生	9	4%
7. 小学校, 中学校, 高等学校	31	13%
8. 報道, 出版関係	5	2%
9. 設計事務所, 建設会社	55	22%
10. その他	57	23%
計	245	100%

当日参加者 所属属性



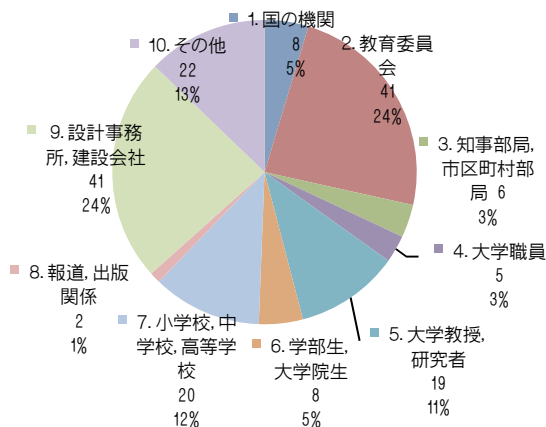
アンケート結果

参加者数:245 アンケート回答者数:172 回収率:70%

①あなたの所属する機関の該当番号に○印を付けて下さい。

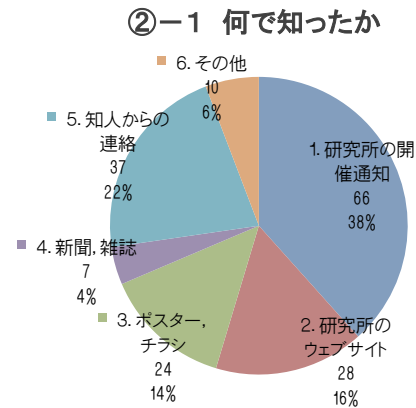
	人数	割合
1. 国の機関	8	5%
2. 教育委員会	41	24%
3. 知事部局, 市区町村部局	6	3%
4. 大学職員	5	3%
5. 大学教授, 研究者	19	11%
6. 学部生, 大学院生	8	5%
7. 小学校, 中学校, 高等学校	20	12%
8. 報道, 出版関係	2	1%
9. 設計事務所, 建設会社	41	24%
10. その他 (メーカー, PTA関係, 民間企業, 経営コンサルティング, 家具デザイン, 大使館, 教育関連企業 等)	22	13%
計	172	100%

① 所属機関



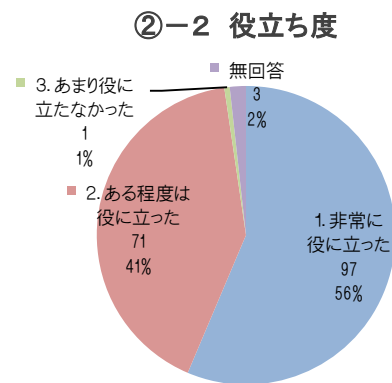
②-1 今回の講演会を何でお知りになりましたか？

	人数	割合
1. 研究所の開催通知	66	38%
2. 研究所のウェブサイト	28	16%
3. ポスター, チラシ	24	14%
4. 新聞, 雑誌	7	4%
5. 知人からの連絡	37	22%
6. その他 (建築学会メール, 大学, 大使館のソーシャルメディア, シーラカンスからの案内 など)	10	6%
計	172	100%



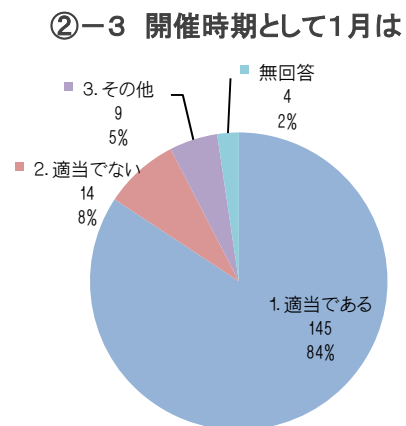
②-2 今回の講演会は、あなたにとってどの程度役に立ちましたか？

	人数	割合
1. 非常に役に立った	97	56%
2. ある程度は役に立った	71	41%
3. あまり役に立たなかった	1	1%
無回答	3	2%
計	172	100%



②-3 1月という開催時期についてどう思いますか？

	人数	割合
1. 適当である (2月, 3月, 4月, 8月, 11月)	145	84%
2. 適当でない	14	8%
3. その他	9	5%
無回答	4	2%
計	172	100%



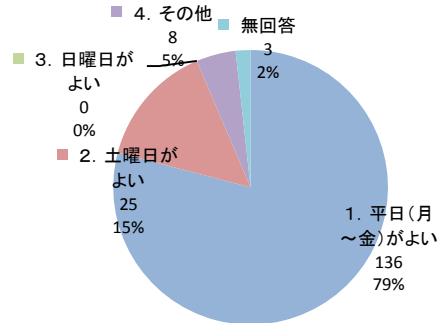
その他のコメント

- ・ 時期は問わない
- ・ 夏, 秋など
- ・ もっと早い時期

②-4 火曜日の開催についてどう思いますか？

	人数	割合
1. 平日（月～金）がよい	136	79%
2. 土曜日がよい	25	15%
3. 日曜日がよい	0	0%
4. その他	8	5%
無回答	3	2%
計	172	100%

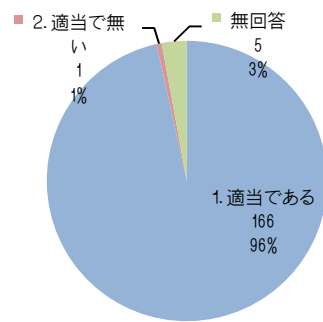
②-4 開催の曜日について



②-5 今回の会場についてどう思いますか？

	人数	割合
1. 適当である	166	96%
2. 適当で無い	1	1%
無回答	5	3%
計	172	100%

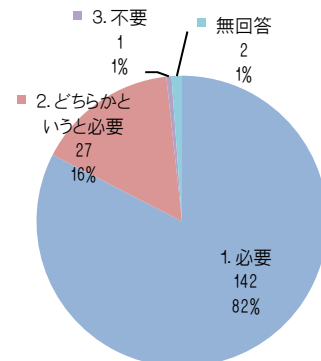
②-5 実施会場



③ このような講演会を今後も開催していくことは必要だと思いますか？

	人数	割合
1. 必要（ 回 / 年）	142	83%
2. どちらかという必要（ 回 / 年）	27	16%
3. 不要	1	1%
無回答	2	1%
計	172	100%

③ 講演会の開催希望



必要回数	1. 必要	2. どちらかという必要
1回/年	26	7
2回	55	3
3回	9	
4回	5	3
5回	2	
1, 2回	9	1
2, 3回	4	

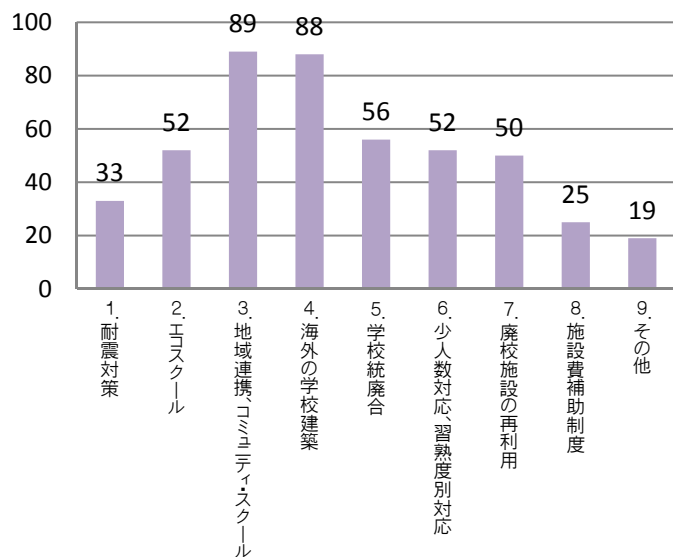
④ 学校施設について、あなたが興味・関心をお持ちのテーマは何ですか？（複数回答可）

	人数
1. 耐震対策	33
2. エコスクール	52
3. 地域連携、コミュニティ・スクール	89
4. 海外の学校建築	88
5. 学校統廃合	56
6. 少人数対応、習熟度別対応	52
7. 廃校施設の再利用	50
8. 施設費補助制度	25
9. その他	19
計	464

その他のコメント

- ・教育方法と学校建築
- ・学校建築の取組（家具・レイアウト）
- ・学校の複合（機能）化
- ・特別教室
- ・図書館（読書活動推進）
- ・インクルーシブ教育
- ・長寿命化
- ・デザイン
- ・防災
- ・幼保・特養教室
- ・職員室
- ・日本の一貫校の事例
- ・ICT化

④ 興味のあるテーマ（複数回答）



⑤ 今回の講演会に関するご意見やお気づきの点がありましたらご記入ください。（自由記述）

- ・パネルディスカッションが充実していた。
- ・海外の事例をもっと聞きたい。
- ・広報に力を入れ、他領域の研究者が参加しやすいようにすればもっと実りのあるものになる。
- ・学校、地域にとって、学校建築の役割（影響）が大きいことを再認識した。
- ・現地に行かなければわからない情報を提供して頂ける機会があるのは大変ありがたい。
- ・質疑応答の時間がもっと欲しかった。
- ・施設のみではなく、具体的な教育政策・内容を聞いてみたい。
- ・会場とのパネルディスカッションの時間がもう少し欲しかった。
- ・造る側だけでなく、そこで指導する立場から小中一貫教育を検証する必要があるのではないか。

「日本とフィンランドの学校建築」講演会参加者アンケート

このアンケートは、今後の講演会について検討する際の参考とするためにお願いするものです。必要事項をご記入のうえ、講演会終了時に会場出入口横に設置した回収箱へ投入して下さい。

① あなたの所属する機関の該当番号に○印を付けて下さい。

- | | | |
|-------------------|--------------|-----------------|
| 1. 国の機関 | 2. 教育委員会 | 3. 知事部局, 市区町村部局 |
| 4. 大学職員 | 5. 大学教授, 研究者 | 6. 学部生, 大学院生 |
| 7. 小学校, 中学校, 高等学校 | 8. 報道, 出版関係 | 9. 設計事務所, 建設会社 |
| 10. その他 () | | |

② 今回の講演会について、下記の中から該当する番号に○印を付けて下さい。

1) 今回の講演会を何でお知りになりましたか？

- | | | |
|-------------|---------------|-------------|
| 1. 研究所の開催通知 | 2. 研究所のウェブサイト | 3. ポスター・チラシ |
| 4. 新聞, 雑誌 | 5. 知人からの連絡 | 6. その他 () |

2) 今回の講演会は、あなたにとってどの程度役に立ちましたか？

- | | | |
|------------|--------------|---------------|
| 1. 非常に役立った | 2. ある程度は役立った | 3. あまり役立たなかった |
|------------|--------------|---------------|

3) 1月という開催時期についてどう思いますか？

- | | | |
|----------|-------------------|------------|
| 1. 適当である | 2. 適当でない→ (月がよい) | 3. その他 () |
|----------|-------------------|------------|

4) 火曜日の開催についてどう思いますか？

- | | | | |
|-----------------|-----------|-----------|--------|
| 1. 平日 (月～金) がよい | 2. 土曜日がよい | 3. 日曜日がよい | 4. その他 |
|-----------------|-----------|-----------|--------|

5) 今回の会場についてどう思いますか？

- | | | |
|----------|----------------------|-----|
| 1. 適当である | 2. 適当でない→ (どんな点ですか?) | () |
|----------|----------------------|-----|

③ このような講演会を今後も開催していくことは必要だと思いますか？

- | | | |
|--------------|---------------------|-------|
| 1. 必要 (回/年) | 2. どちらかという必要 (回/年) | 3. 不要 |
|--------------|---------------------|-------|

④ 学校施設について、あなたが興味・関心をお持ちのテーマは何ですか？(複数回答可)

- | | | |
|-------------|------------|----------------------|
| 1. 耐震対策 | 2. エコスクール | 3. 地域連携, コミュニティ・スクール |
| 4. 海外の学校建築 | 5. 学校統廃合 | 6. 少人数対応, 習熟度別対応 |
| 7. 廃校施設の再利用 | 8. 施設費補助制度 | 9. その他 () |

⑤ 今回の講演会に関するご意見やお気づきの点がありましたらご記入ください。(自由記述)

記入欄：

平成25年度 国立教育政策研究所 文教施設研究講演会
日本とフィンランドの学校建築
日本の施設一体型小中一貫教育校とフィンランドの総合学校を中心に 報告書

発行年月 平成26年8月
発行者 国立教育政策研究所
〒100-8951 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号

Copyright 2014 by the National Institute for Educational Policy Research (NIER)
All right reserved